

工+344380

18-550



幻術

附

神

と

幽

霊

の理容

全

議に妖に怪に歩の範囲廣き加へん夫れ然り然れと眞理の不思議の終
 觀に妖に怪に歩の範囲廣き加へん夫れ然り然れと眞理の不思議の終
 にを以て萬象を窺へは滿目總て是れ妖怪不可思議の眞理の不思議の終
 の物象を辨するに過ぎて影は如く廣漠無邊の眞理の不思議の終
 書燈の光穂は淡と過きを何そ廣漠無邊の眞理の不思議の終

目錄

Handwritten mathematical calculations, including long division and multiplication, on aged, stained paper. The calculations are arranged in several columns and rows, with some numbers underlined. The paper is heavily damaged, with significant staining and missing sections.

古依然たり唯觀察の廣狹に依りて斯の如く感ずるのみ

神秘なる靈界のこと未だ俄に世の俗見を以て斷すへからを機先の觸るゝ處光明を放ち靈焰を發す蓋し此間の消息の素心を以て之を觀するにあらずされど天造の眞趣は終に之を解することを得ざるあり

此編中記述する處元と心靈機微の作用に属す故に其の所説時に怪力乱神を語るに似たる者あらんと雖も著者固より好て奇を談する者にあらず唯虚心を以て觀察せる所のまゝを記せしのみ

此書か世の學者の爲めに容れられさることは著者の豫め期する所にして又深く之を望む者にあらず唯幸に實踐の士ありて同感を表せらるゝに逢はく著者の幸何物か之に過ん記して以て序文に代ふ

明治廿七年十二月

長春閣主人識

目次

總論	一
幻術の由來	二
古代幻術の方法	十五
幻術の實驗	十九
狐狸の妖術	二十一
神	二十九
日本上代の神の靈物あはらす	四十
幽靈	四十五
非幽靈	六十八
靈魂 生靈死靈	九十二
夢及奇夢	九十九
斷食	百十四
十四日間斷食の試驗	百二十八
幻術の應用	百四十二
結論	百五十一
	百五十八

幻術の理法 附神と幽靈

近藤嘉三著



總論

半夜燈前に妖怪を感ずれば窓外の芭蕉も幽鬼の來り襲ふかと疑はる
 況んや亦心力平均の作用の時に物象の轉化と相關係するものあるに
 於ておや機の動く處轉變窮りあることなし
 心機の活動の猶磁氣の流行するか如し感ずれば動き動けは則ち變じ
 其の現象甚だ奇なるか如しと雖も亦是れ物力二者の關係たるに過ぎ
 ず水石の激えて聲をかし楓葉の霜に逢ふて色を變ずると何ぞ擇ん然
 れども心靈の活動に其の機能の玄妙あるか爲めに古來多く之を妖怪
 とおし不思議となす

抑怪談の起り奇説の行はるゝの固と其事由の明らかならざるに由る故に若し之を分拆解剖して其の由來を求め道理を究むれば其の妖怪の亦妖怪ならざるに至んのみ

蓋し人の心性の悟性覺性等に属する作用の他に更に一種特異なる靈光を放つ者なり之を心靈の感通作用と云ふ即ち甲乙彼我の間に心力の感傳波及せるの機能にして之に由り以て他人の心身を制し又我が心身の他人の意思に制せらるゝの妙機あり換言すれば五官器に由りてして已れの心力を他人に通し他人の心力を已に感受して種々の行為をおす者なり此妙力の獨り人類相互の間に感傳するのみならず廣く宇宙の萬象に通して之を感格連貫することを得故に之を稱して心力の平均作用と云ふも亦可あり

此の心力感通の作用の精神作用中の殊に靈妙奇異なる者にして全く五識の外に卓立せる者なれ其の機能の隱約機微なるの素より論を俟たず之を他の五官機能に比するに蓋し日を同ふて語るへからざる者あり故に之を知ること頗る難く之を説明するの又更に難き古來の史上に証明せる處の多くの事實及び各人が往々實地に見聞せる所に由て感通即ち心力平均ある事實の體に存在せることを知ると雖ども未だ其の感通の如何おして起り如何おして行はるゝかの疑問の未だ何人の口よりも之を解説せられたるを聞かす多くの之を奇怪不可思議の暗黒界に投し去るおあらされの理外の理法外の法とて不可知的事柄なりとなすに過ぎず

事實に必ず之に隨伴する所の道理の伏在する事と言ふまでもなし故に茲に不思議なるか如く見ゆる事實ありとせざるも必ず其の由て然るの道理を裏面に伏在せるものにして未だ決して道理に由らざるの

事實あることなし之を如何そ普通の道理を以て解釋し得へからずと
おすことを得ん正法に不思議なく道理に二途おし世の妖怪を研究する
もの動もすれへ己れの智力に解すへからざるの現象に逢て此の理外
の理あり彼の普通の道理に由て解釋すへからざる事柄ありと絶叫す
るの偶々以て自己の識量の狭きを示すお過ぎす
感通も古へ之を不思議の一に數へられたりし然れども余の體に之
を一種の心力作用ありと思爲して之に關する種々の試験をなし又世
人が見聞したりと云ふ處の事實に由て聊か之を茲に記さん然れども
固と是れ無形の理法に属するもの或の謬見誤想なきを保す可らず只
記して以て世の同志の徒に示すのみ若し幸に其の誤謬を擧げて之を
正すを得は著者の幸ひ何物か之にすぎん

感通の固と心力の波動作用に由りて起る心力の波動の腦髓細胞の作

用の轉えて精神作用お變化するに由りて起る即ち張力の變えて活力
となるの際に起る處の一種の振動作用に基く者ならん

人の精神作用の大腦表皮に存する處の灰白質細胞に由て發す即ち
灰白細胞作用の變して精神となる者にえて精神作用の當體の腦髓
細胞に外ならず然れども精神作用の腦髓作用にあらすえて腦髓作
用亦精神作用にあらざるあり

凡て心力の感通の一定せる目的の場所に到達するにあらされへ其の
作用を現せざる者にして例之の光線及び音響波動の反射の其の燃焼
點又の反響を聴取え得へき中心點にあらされへ反響を聴取し又の物
體を燃焼え能へざるか如し而して其の燃焼點の以内たると以外たる
とを問はず他の位置にありて何等の影響を感せざるか如く心力の
波動も亦其の目的以外の人にへ仮令幾許の距離を隔つるも更に感通

を妨げさるゝと共に何等の影響をも及ぼすことなし
 心力の機動波及の固より機微隱約なり又幽幻如影なり五識を以て之
 を知ることも能はざるを以て彼我相隔絶せるの間に其の機動を波及す
 ること、或は之を疑ふものあるべしと雖も彼の避雷針の電氣を吸収
 せし磁氣の鉄片を吸引することを知らず蓋し思ひ半はあ過ん
 感通の之を區別して施感受感とを分す施感と感通せしめんとするの
 心力にして受感とは其の心力を感受するを云ふ而して其の機能を感じ
 通と云ひ感通の結果を感じると云ふ今試に之を論せんに感應の有無と
 多少の施感力の強弱如何に比例するものに於て施感の心力愈々強け
 れば感應從て著しく且つ速に之に反して其の心力微弱なるときは感
 應遲緩あるが或は全く感應あることなし心力の強弱と或る目的を
 達せんとせし又は達せ得べしと信する所の信仰心又は願望心の強弱多

寡を云ふあり精神一到何事不成思ふ事の成を得るものなり蓋し此の
 理に外ならず

受感者が施感者の心力を感受するの身体中何の部分よりするもの
 なるやは明らかに之を知ること難しと雖も恐くは大腦及び小腦よ
 りするにあらざるか若し然りとせば大腦より意識上の心力を
 感受し其小腦よりするもの、身体運動上に關するものを感受する
 ならん例之の水を以て牛乳なりと思せしめ熱湯を以て酒なりと思
 爲せしむるか如きは大腦表皮の細胞之を感受し又四肢の運動行爲
 等に關する事の之を小腦より感受するものならん是れ大腦は意識
 の府にして小腦の運動の中心なればなり刺客某曾て余に告て曰く
 凡そ戰場に劍戟相撃つや敵の劍鋒の將に我頭上に落ち來らんとす
 る時全身先づ戰慄するか如き感あり而して其の戰慄は始め前頭部

に起りて忽ち全身に及ぶを覺ゆ又魔物即ち狐狸の類に突然出逢ひたるときも同じく全身に戦慄惡寒を感ず然れども此の時、後頭部の邊より氷を灌かるゝか如く寒戰するを覺ふ是れ劍法の秘傳に載する處にして又屢々實踐せる所ありと此の一小話亦聊か前説の參考とあすに足らん

白刃を以て戰場に相撃つや相互の心力、共に敵を倒さんとするに、あるを以て心力充實して容易に之を斬ること能はずと雖も若し敵手にして心力の充實を欠き寸隙と雖も其の乗すべきの機あるに逢へば流星一下直に之を斬ることを得んこの虚實一瞬の間、殆んど間髪を容れざる咄嗟の間にして筆舌の容易に評することと許さざる所あり夫れ然り然れども此の際に於ける劍鋒の上下、一に心力と相伴はざるべからば故に劍鋒の下ると共に心力先づ敵の心身を

制して心力劍鋒相俟つて敵身を斬る其の心力、前にも云へるか如く此際大腦より感受せらるゝならん

狐狸の類か人を魅するや其の意恐く、人の心力の虚に乗せて其の心力を注入附翹し心身を制して運動左右して人類を玩弄するにあはるか故に狐狸に魅せられたるとき、其の人の大腦作用休止して心力空虚となり恰も偶像に狐狸の心力を附翹したるに異ならず即ち其の間、人体孤心なりと云ふも不可なきか如し此の場合に、狐狸の心力を小腦より感受するものなるか

凡そ心力を感受する際、受感者の精神作用休止して全く無爲無我の際に在るものとす無爲無我の時、即ち無想無念の境遇として苦痛なく又快樂なきの時なり實にこれ心靈本來の面目にして全く物我を忘却したるの時なり既に物と我とを忘る其の炯々たること新磨の明鏡

の如く又清き水の如し故に物ありて之に臨めり忽ち之を現し影ありて之に向へり直ちに之を寫す必ずしも其のものゝ月と花とを論せざるなり又之を譬ふれり靜穩なる水の僅少の衝動に由ても忽ち之を傳へて水面幾多の皺紋を畫くか如し然るに若しこれに反して受感者の腦中僅微の精神作用あるも其の間他の心力の之に竄入するの機なきを以て決して其の心力波動を感受せることなし

心力の前來縷陳せるか如き狀に由て感通傳播せるものにして既に一たび心力の感通せるに至れり受感者の全く自己の精神を忘失去て心力其の作用を逞ふすることを得ざるものなり故に己れの思ひさる行為をなし又己れの知らざる事柄を語り其言語行為の悉く施感者の心思に従ふ者にして恰も一時施感者に憑附せられたるか如き觀あり例之の其の心中に更に知らずして或は手を動かし或は足を舉げ或は

又奇異ある音聲を發して種々の事を語り甚まき未だ曾て見聞せざる所の風土景況を語り未だ學へざるの文書を読む等彼の催眠術を施されたる人か術者の命に従ふに似たる現象を呈するか如し此の如き一見頗る不可思議なるか如しと雖も是れ決して不可思議なるにあらず又奇怪あるにもあらずるあり悉く皆其の裏面に由て然るの道理を隨伴せるものなり更に之よりも不可思議あるか如き心力を以て他人の身体の組織機能を變改轉換することは是れあり祈禱に由て疾病を治療せしめ咒咀に由て人を殺すの類皆是れなり

以上記する所の頗る奇怪なる現象なるか如しと雖も彼の貴人強者等の面前に於て身体壓伏せらるゝか如きを感じ恐怖せる時に心身萎縮して不覺の行為をなす等其理皆之と異なるよしと讀者先づ以上の理を知らされり後條の諸説を解するに或は惑ふ事あらん夫れ心せよ

幻術といふ術者の心力に由て他人の心身を制して自由に之を行動左右せしめ或は又種々の幻影を視覺せしむる所の方術を云ふ是れ亦魔術等と同じく心力平均の妙機に由て起る所の一種の現象に外ならざるあり故に一たひ之に感すれば術者の思爲する所に従て或は右ま或は左し或は笑ひ或は泣き席上山を現し目前海を生じ百花の爛熳たる處驚語滑に囀する春園の曙色月下に笛聲を送る荒涼たる秋風の夕一々術者の思爲する所に従て之を現す何ぞ夫れ事の奇にして且つ怪ある又若し被術者の目前に一箇の杯子を置き之に牛乳を盛れりと思爲せしめんと欲すれば被術者之を傾けて頻りに其の味ひの甘きを賞し之を葡萄酒なりと信せしめんと欲すれば被術者の直ちに其の意思を感じて嗚呼香ひしき葡萄酒あるかあとして之を傾け其の芳烈を賞すへま

まかも満面微紅を潮して時に醉語喃々することあり

凡て斯の如き奇異ある現象は殆んど彼の催眠術に感せしものゝ行爲に類して尙且つ之よりも奇怪なるものあり加ふるに催眠術に在ては

五官の媒介に由て始めて之を感ずるものありと雖も幻術に在ては全く五識以外に卓立して直に心力の作用のみを以て之を行ふことを得其の妙趣素より同日の論にあらざるあり

心力の甲乙彼我の間に感傳波及まて其の平均を求めんとするものにてまて其の活勢は克く對者を感格まて之を自由に制するものかれは術者の思爲固信する所の對者悉く之を感じて終に術者の意思と連合一致して全く同化するものなり對者といふ獨り人類のみならず他の有情物非情物をも總稱す

斯の如く心力の其の平均を求めんとする作用に由て克く他を制する

ものなりと雖も何人にてても隨時隨所に之を成し得へきと信するの大なる誤りなり是れ心力波動の平均を求むるの其の求め得らるべき時機に於てのみ作用を逞ふするものにして時機と對者の心力休止して全く無思放念せる場合を云ふ人若し放心無想ある時の其の精神作用休止して極めて安靜沈穩にしてまかも動かんとするの機を包藏するものあれば苟も他の心力の來て之を衝動刺戟するに逢へば其の休息せる心力の其の精神作用となりて現はるることなく單に其の活力のみを刺戟力に加へて活動を發作するものあれば術者の心力の益々其の勢を逞ふして能く其の目的を達するものあり休止せる心力の猶平穩なる水の如し故に若し微物ありて之に觸るれば忽ち波動を起して皺紋を傳ふるが如し其の相映し相激するもの變して聲をなし又色をおま花唇爲めに動き波情色を變す

夫れ然り心力の感傳は總て他の放念無想ある時機を撰むことを要するを以て若し對者にして此の時機の乗すべきものなきとき心力の感傳意思の移付は終に全く効を奏することなかろへし此の故に人若し他人をして自由に己の意思に従はしめんとせば先づ機に乗すべきものを察すべし場所の靜肅あるも不熟者に在ては頗る必要なるか如しと雖も多少の習熟を経るに至れば場所の靜騷如何の終に施術の妨害とあることなかろへし只此の知機の妙趣にして了得したらんに幻術の施行感傳は誠には是れ易々たるべし

幻術の由來

幻術の由來頗る古し東西の各邦共に古來宗教家の手に弄せられて専ら之を鬼神靈物の威力に歸し盛んに奉拜敬畏したるものゝ如しカルデー、ペルシヤ、バビロン等の諸民族は既に遠く千二三百年の以前

に之を施行またり愛蘭のバレンタンクレートクハ有名なる幻術の名手にして其應用の妙往々人をして驚嘆せしめし者あり愛蘭の民族の氏を指えて氏の鬼神より幻術の妙力を授與せられたりと云ひしか如き以て其の術の如何に巧なりしかを知るへし幻術の進歩の世を逐ふて巧を加へ千七百年代に於て瑞西のカスネル澳のメスメル等輩出して更に其の術の進歩を促したり然れども幻術ハメスメルに至て全く其の説を一變え幻術ハ學問上の問題となりて漸く宗教家の手を離れんとするの傾きありえメスメルハ獨り幻術の巧手たりしものならず彼の催眠術の妙手にして殆んど此の術の蘊奥を究め種々に之を應用することを勉めたるか如し殊に之を治病上に應用えてまゝ良好の結果を得今日の學者をえて催眠術治病説を唱ふるの端を開かめたるものハ實に其の効をメスメルに歸せざるを得ず

メスメルハ其の學ひ得たる醫學及び理學の力に由りて之を學問上の道理に合せしむるを勉めたりと雖ども世人ハ尙昏々として迷想恐怖に附翹せられて一向に之を鬼神の靈能に歸せたり從て幻術を行ふ者ハ幻術師又ハ魔法師雨師等種々の名稱を附して之を尊敬畏怖え特殊なる種々の優遇を與へたり

古代の人民ハ如何に幻術を畏敬し又之を行ふ者に對えて如何ある感念を抱きしやハ古代のバタコニヤ人の妖術師ハ己れの惡む所の敵人に害を加へんとする時ハ其の肖像に向て術を施し以て其人を殺すと云へるか如き又ヒブリエー人及びエヂプト人ハ魔法師ハ鬼神の幫助を得て遠隔せる土地の風景を眼前に出現せしむる者なりと云ひし傳説の如き又バルフートと云へる印度の或土人ハ幻術師に向ひ汝ハ如何なる神と通談し得るや又其神ハ如何に靈力を現し得べきや等の

事を尋ねしと云ふか如き其他リシイと稱する詩人か雨師に向て願く
 い汝の信する所の神の力に由て乳汁を出す所の牝牛を此所に作り出
 せと云ひしか如き幻術師を以て全く人類と鬼神の媒介者と信し従て
 幻術師の所爲の之を鬼神の靈能と思爲せしか如し

我國に在ても幻術の流行の佛教の渡來と共に其端を開き又屢々其の
 妙手を出せり弘法、日蓮、清明、役の行者等の實に其の先達にして自由に
 幽顯に出入し鬼神を使役し妙趣神に通し其術の高妙深遠なること之
 を彼の幻術師、魔法師、雨師等の爲す所に比するに殆んど霄壤の差あり
 然れど邦人の之を見る者亦之を人類以上の行爲となすの勢の免れさ
 る所にまて往々彼の人々を目して鬼神とあし佛陀とあして奉敬畏怖
 することい今日も尙人の目撃する所あり彼等の學識德行非凡にして
 遠く俗流を踏破えたる達人たりしに相違なきも其の奇行か亦俗人

の眼を眩惑して之に恐敬の念を抱かしめしに決して疑ふへからざる
 の事實なり現に近人か彼等の肖像廟宇に向て崇拜する所の者を見よ
 其の死後の人たることを忘れ猶曾て生前彼等か現はせし如き奇瑞を
 あし得へしと信して種々の事を願望祈念するにあらずや

古代幻術の方法

古代の人種は種々のことをあして幻術を行ひたり或は死人の身体の
 一局部を取りて焼焙し之を散布して幻術を行ひ或は水獺の舌野獸の
 牙等を以て幻術を行ひ得へまといひし幻術者の斯の如き者を勉めて秘
 藏せり即ちパタゴニヤ人の妖術師か人の毛若くは爪甲を以て種々の
 幻術を行ふ者なりといひし之を他人に得らるゝことを大に恐れ印土
 の某部落人種の魔法師は人の血液を得之に由て其人に種々の幻術を
 施す者なりといひしチツペウ人の幻術師に托えて木製又は土製の人

形を作り其の腹部を突き通して木屑土粉等を其穴に填め以て疾病を他人に移したりと云ふしメキシコ人中には水蟲の一種を取り之を焼焙して其の粉末を自己の目的物に散布し之れを自由に支配して妖術を成し得へしと信せるか如き或は又魔法師の死人の骨を以て製したる粉末を散布して能く人を恍惚たらしめしと云ふか如き或は蜥蜴の眼と墓の足の指とを煮て之を以て妖術を行ひ得ると信したる等其の方法頗る多種なりと雖も要するに此幻術の施行の方法の如何に由るにあらずして信力の強弱と否とに由るに外あらず

前述せる方法の如き獨り他人か之を信するのみあらず幻術師妖術者自らも之に由て幻術の行ひ得へきとを固信せざることもなし我國に行はれし幻術の方法中或は指を握り或は之を屈する等彼の印を結ふと云へる者の幻術の一法たるに相違なきと雖も是れ亦其方法の如何に

由るにあらずして只其の信力に由りしこと疑ふへからず

幻術の實驗

一種の幻術あり鎮魂術と云ふ西歐傳來の法にあらず又我上代の遺法にもあらずるへと思ふに近世宗教家の發明試行せし一種の方術に於て恐らく或る場合に偶然發見したる者あらんかその兎も角も余は此話を瀬川氏に聞き又之を瀬川氏の家に實見せり是れ實に心力の他を感格する妙用の好喻例に於て一種の幻術に外ならされり記して之を同感の士に紹介すべし

此の實驗は昨年十一月三日即ち天長節の夜上野山下ある瀬川氏の家に於てなせし所なり午後七時より實驗に着手すへき旨瀬川氏より通知ありたれば余は一人の友人即ちこの友人の「キリスト」教の信者にして心理上の學問もある人故此人を立合人兼參加人の心得

にて時刻少し前に實驗の場所に至れり此術の術者の佐曾利氏と呼
へる一紳士にまて年齢四十前後あるべく体格の中等なれども充分
に肥滿せる方にて一見中々に莊重なる容貌あり余の始め瀬川氏に
約えて故らに匿名にて參加する筈なりしに(こは心性上の意見に付
佐曾利氏と少まく見る處を異にせる由傳聞せるに由り若し各自の
所見に由り議論などの面倒を避んか爲めなり)件の肥滿紳士先づ言
葉を掛け貴下の今夕匿名にて來らるゝ由傳承せり然れども斯くて
の面白からず充分に意見を戦ひし幽玄を談する方興味深かるへし
とて夫れより二三の談話をなま先づ兎も角も實驗に取りかゝらん
とて實驗の場所に入れり當夜の參觀人は余等兩人の外に一二名の
紳士と主人瀬川氏あり實驗の場所にい已み六七名の病者(健康体の
人も見受たり)一齊に列坐して余等の入るを俟てり場内ふの二基の

燭光微に光を放ち滿座靜寂として光景先づ自ら神々し各一齊に
敬禮またる後術者の別に少しく離れたる所に着坐し病者に向て暫
く閉目して心中に自己の疾病の平癒せんことを默禱すへま而して
笛聲の發るを合圖に祈念を止め何事も思爲することなく放念無想
とあるへし若し身体動搖するか如き感あるも動搖するを任せて強
て之を止めんとするか如きあとを避くへし且つ最後に拍手の音を
聞かへ目を開くへましと施術中の心得を説き聞かせたるのち心中
に默禱にへきを命したり病者の一齊に默禱祈念を始め術者自らも
亦頻りに何事か祈念し始め其の熱心ある時々座間を感動せしむる
か如きを感じり斯の如きこと三四分時にして術者の目を開き病者
の光景舉動に注意し熱心に其機の全く熟し居るや否を探る者の如
し暫くして術者の其の懷中より拳大の石笛を取り出し之を吹き始

めたり忽ち急にして又忽ち緩あり殆んど心力をして甲乙を接着せしめんとを勉むる者の如し席上更に清肅を加へて却て荒涼の思ひあり余の病者の舉動如何と見回せしに只見る一箇の小女其頭の頻りに微動するか如きを此の微動の次第に勢を増して漸く其の運動を加へ頭首を前后に廻轉すること恰も機械にて作りし者の如く運動次第に加はりて頭首の全く後ろに仰折し殆んど其の後頭部が脊骨に密着したるかど疑はれ其の次に坐せる一老婦人の此時又両手の上下運動を始めて頻りに左右手を揺かせり不思議實に不思議あり此の運動の次第に傳はりて今の列坐せる病者一齊に運動を始めたり指を屈伸する者足を上下する者膝を打つ者其の奇怪なること一の電力に種々の機械を仕掛たるか如し是に於て術者の吹笛を中止せ如何に實驗せられまやと云ひつゝ閉目して拍手一番せまに

不思議や種々に行動せし病者の一齊に之を止め敬拜えて施術の難有かりしこと病苦の輕快せまことを謝せり茲に本術の實驗の全く了りを告げたるを以て予の病者に向ひて施術中の模様を問ひ試みしに或は恍惚として之を記し或は又全く之を知らざる者あり其狀恰も催眠術醒覺後の人の如し

此の現象の如何なる理由に依りて起り又如何にして病者が輕快を感せしかん本編各章を熟讀せし之を解することを得へけん現に瀬川氏の如き之を實地に施行し今の大に其の妙に達したり又此の實驗の終りたる後佐曾利氏の傍の紳士に語りて予の空中に種々の神体を現ることをも成し得へし熱心に望む人あらは何人にも神体を拜せまひへしと云へり此の實驗の予未だ之を見ずと雖ども亦恐くは充分なる結果を以て心力感傳の妙用を證すること疑はざるあり

紀州高野の僧某深く顯密の法を修して法徳殊に高かりし或時某藩の士田邊某尋ね來り種々の立談に夜を深しゆる寺の弟子便所に行かんとして戶外に出でしに彼方の樹のかげに何やらん白き衣きたる者の佇み居るに驚き歸りて和尚あかくと告ぐれり和尚ハ打笑ひつゝさるへき道理なし佛道修業せん者さる小膽ある様にてハ叶はすと叱りこらせしに傍らに聞き居たる田邊某ハこの面白き怪物の正体見顯さんとして立出てけるに和尚も共々打連れ庭に出て見るに不思議や小僧の云ひし如く白衣をきたる者樹下に佇み居て此方に向ひ動き來る様なりまかは田邊某ハ帶刀に手をかけ一刀に斫捨れど身搦へけるを和尚ハ之を止めて貴殿を煩ひすまでもあしとて例の顯密の法を以て何事か口の中になへつゝ彼白衣の怪物の方に向ひ指にて十字を二三度かくと見しか怪物ハばたりと音して仆れ

ける和尚小僧を顧みて今ハ恐るゝに及はす怪物の屍見てこよと云ひしかハ田邊某も小僧と共に走り寄りて見るに怪物と見しハ大なる誤り新しき白衣の裊共に眞二つに切れて落ち居たりし田邊某ハ一向に和尚が法力の程を感じそれより弟子の約をひすひて顯密の法を學ひしと云ふこの談話ハ予ハ高野の僧某に聞きし所あるか只野綾女ハ著ハせま奥州波奈志と云へる書にも之に似寄りたる談話を載せたりこの法ハ「めいしん」と稱して出家ハ災厄に逢ひしとき身をのかるゝ爲めの秘法ありと

明和安永の頃某藩に上遠野伊豆と呼へる士あり祿八百石を領して武藝に熟達し殊に手裏劍の妙手なりま此人又奇術に巧にして種々の行爲を以て人を驚かせしと少からず或時知己の人々伊豆の家に會飲せしとありし時伊豆人々に向ひ今日の慰みに芝居し見せん

とてつと立ちま間に座敷一面舞臺の体とあり高名の役者出て來りてたちはたらく体夢ともうつともつかす人々あきれ見てありしか鼓三絃の音面白く一幕終りまとき伊豆手をうち今日の芝居面白くいなかりしやと打ちえみて語りけるにそ人々氣を吞れて言葉さへ出てざりまとき當時伊豆の狐を怪ふならんあやしき事多しなど噂高かりしよし

狐狸の妖術

獨り小説講談に之を傳へらるゝのみならず自ら狐狸の幻術に陥りたりと語る人少まとせす然れども多くい之を以て一種の精神病となし或ハ一時の精神變象ありとて無稽の說話として抹殺せらるゝか如し蓋し亦安排の徒たるを免れざるなり然れ共彼の小説に傳へ講談に演ずる所の全く虚構的の者ハ勿論自ら實踐目撃またりと語る所の話説中にも往々事實の真相を失えて殆ど虚實相半はするに至る者あり是れ故らに虚を構ふるに非ざるも彼の狐狸の妖術に罹る時などい多くハ精神の正確を欠き事實を轉倒する事を免れざるを以てなり故に眞實の談話も狐狸談と云へハ聞く人も大概ハ之に信を措く事少き者あり故に狐狸の妖行に就て之を研究せんとするにハ宜しく事實を詳密に調査し其話説を分拆えて能く虚實

を取捨せざる可らす否されん賤婦痴漢にも愚弄せらるゝ事あり
世の狐狸談中に種々異分子を混合せる者にして全く狐狸の所業に
あらざる事も其現象の奇怪にして一見其道理の解し難き者の時に之
を狐狸談の一に加ふる事あり例之枯骨の燐光を放つを見て狐狸の所
業に歸し昏夜道に迷ふて狐狸の所業となすか如き今狐狸の所業なり
と世に遇せらるゝ者を取て類別すれば凡そ左の如く分拆せらるへし

原因外界にあるもの即ち理龍卷、燐火、蜃氣樓、地
化學を以て説明し得べき者鳴潮聲、怪鳥、怪獸等

原因内界にあるもの即ち心
理學及生理學に由て説明し得べきもの
思想の變象に由るもの

全く狐狸の所業に由るもの

狐狸の怪行を説明する者を見るに悉く之を外界の現象に歸し理學及
ひ化學を以て説明解釋せんとし或は又悉く之を内界即ち心理上の作
用のみに歸して説明せんとす然れども是れ實に彼の妖行を以て務め
て物と我との二つを局在せしめんとする者にして其の眼光の未だ狐
狸に及ばざる者と云ふへし斯の如き理論は他の妖怪の一種をして偶
々眞の狐狸談より分離せしむるの効力を有すへきと雖も之を以て
到底眞の狐狸の妖行を解釋するに覺束あかるべし狐狸は人類と
同じく其心力を注集し他の動物に感傳し得るものにして吾人の心力
が他体に感通すると同じく他の心神散漫せる際に克く之に乗じて
憑附することゝをなす得へし即ち之を由て以て人及び他動物を玩弄し
或は又食物を奪ふことをなすものなり狐狸の妖行は人を魅して之を
愚弄し或は人に附憑して己の嗜慾を逞ふし其他嘯詐貪行種々あれど

も要するに皆吾人の心力感通と同一の理にして心氣の感傳に外ならざるへし殊に其の猜性ある尤も能く他の心力の虚實を察するを以て其の妖行を逞ふすること實に意想の外に出るものあり故に一たび彼の妖術に罹るときは其人たると他動物たるとを問はず一に彼の心のまゝに行動せらるゝものにして彼右せんと欲せしめ左せんと欲せしめ則ち左せまむ一舉手一投足悉く其の願使に任するものにして恰も人形師の人形を操縦するに異ならず彼狐狸も亦其の妖行を屢すすれい愈々其の巧を加ふるものにして之を行はさる時の終に其の能力を消亡するに至るものゝ如し其の老練熟達せる者は妖狐老狸と稱して時々人類を苦ましむることあり世人往々狐の犬に向て一步を譲ることを信ずれども若し狐にして犬の形姿を先に認めたらんに犬の又人類の魅せらるゝか如く玩弄せらるゝものにして是れ亦其の放心

せる時に乘して心力を感傳せしむるものなることを知るへま狐の他動物特に家鶏等を奪ふを見るに彼の先づ家鶏の所在に向て其の尾を左右に掉揺えて一向に心思を之に注集するか如きの狀を成す斯の如きこと數分時なる時の家鶏の巢にあるものの忽然として地上に墜落するを以て彼の直ちに走せ寄り以て之を咬へ去ると云ふ是れ實に催眠術に行ふ法式并に狐か人を魅するときに於る行爲に能く類似するものにして其心氣を凝結注集するの狀を知るに足る茲に狐狸妖行談の一二を記して讀者の覽に供す其談固より傳説に係れい多少の誤謬の如きは請ふ之を咎むること勿れ

ニユー・ストンとグラスゴーとの間を駛れる夜瀛車の將にある一停車場あ着せんとする少し手前にて軌道の中に十八九才の少女が餘念なく遊び居るより技手い大に驚き直ちに其の進行を止めて彼

の女子を軌道の外に退け再び進行を始めしに暫くして又以前の少
 女子軌道の中にたゞすめるに由り技手の頻りに汽笛を吹きあらし
 て之に注意せしも彼の女子の亦少しも之に感せざる故に又汽車の
 進行を止めて之を退かしめんとせし時今まで此所にありし女子の
 影たに見へされぬ頗る之を怪みて又汽車の運轉を始めしに彼の女
 子何所よりか來りけん又軌道に出づ斯の如くする事再三あるか故
 に技手の心を決して其の進行を續けたりしに大なる狐其の軌道に
 轢死し居たりと我國に於ても頗る之れを似たる話しあり西京大津
 間の汽車開通して未だ幾許あらざりし頃技手例の如く機關を運轉
 して西京より大津に向ひ今や逢坂山の墜道に入らんとせし時忽ち
 其の車前に大なる山を現して軌道なきを以て急に進行を止めて之
 を檢せしに軌道の依然として前に通れるを以て技手の頗る不思議

の思ひをなまぬ再び汽車を進行せよめんとすれぬ又前方の一面の山
 と成れるを以て又進行を止めて之を檢するに軌道の依然たること
 亦前の如くありし茲に於て技手の始めて其の狐狸の所業なること
 を知り且つ此の近傍に老狐の徘徊することの常に知る所あるに
 由り斷然として其の進行を始めしに軌道に當て一聲の叫びと共に
 山の全く消失せり之れを檢せしに老狐の壓死せられ居たりと又曾
 て余が知人新橋より乗車きて赤羽に至らんとて途中目黒の停車
 場に至りしとき軌道に數多の兵士が戦装せるまゝ或は腕き或は佇
 立し三々五々一團となりて休足せるを見しより何くの兵士なるか
 を同車の人に尋ねたるに是れ全くの兵士あらず狐の惡戯をなす
 なりこの停車場の近傍に往々斯の如き惡戯をなして人を驚かす
 ことありとて其の實況を語りしことありと

赤坂區某華族(氏名詳かなれども故ありて略す)の邸にて其の宴席に於て時々瓶子小皿等の如き食器の紛失することありし始めに何人かの戯ありとて更に注意せざりとも屢々斯の如きとあるより茲に始めて不審の感を起し之を某學者に尋ね又祈禱等をなせとも其の奇怪い少しも以前に變ることなく來客ある時に時々この奇怪ある或時某々哲學者俱に招かれてこの邸に會せしことあり宴酣あるに及んで又彼の奇怪い始めに瓶子先佐紛失して小皿鉢又其の形を失ふ某々等頗る之を探るも少しも其の端緒を得ず家扶之を狐狸の所爲と察し陷穽を設けて終に大なる狸二頭を獲たる後彼の奇怪い全く止みたりと云ふこの談話に該邸に出入する某氏の直話なり余か知人山田某谷中清水町に寓す曾て上野廣小路の酒樓に飲み残肴を携へて歸路に上る友人戯に残肴を狐狸の爲め奪はる勿れと

注意す然るに如何にせしか途を誤て深更に其家へ歸り彼の残肴を檢せしに僅に空箱を残して食物の皆何れへか消失せり之を人に語るに皆狐に奪はると云ふ果して然るや否を知らずと雖も記して參考の一に供す

木曾の人山村氏の旦那寺に靈巖寺と云ふあり寺中に久しく住める老狐ありて寺僧の使指に由り種々の用を便す其の熟練殆んど人の如き曾て之に書を帶せしめて例の如く近村の某所に使せまひ途荒茫の野を過ぐ偶々獵人あり銃を肩にして行くに逢ふ獵人之を見て其狀の稍々常人に異なるものを怪み其の離隔するに及んで銃を以て之に擬す何そ量らん純然たる一箇の老狐ならんとい銃を撒して之を見れば又是れ老僕の使用するものゝ如し獵人心頗る之を異ひと雖も終に意を決して發砲せしに銃丸に誤たす彼の老僕を倒せ

り近て之を檢するに先に見し一箇の老狐首に書箱を帶して他に使
 するものあり書ハ靈嚴寺より他に宛たるの書狀あれハ獵人の驚き
 直ちに彼の寺に到りて此の頗末を語りしに寺僧も大に驚き且つ哀
 みて厚く之を葬りしと(磯野氏の談話)

曾て奥州伊達家の士に鯨江六太夫あるものあり頗る吹笛の巧手に
 して當時并ふ者なし六太夫雨の夜月の夕之を弄えて密に樂みとな
 す一小童あり其の何れのものたるを知らずと雖も常に來り六太夫
 の邸外に佇みて熱心に其の曲を聞く六太夫其の熱心を愛して常に
 之を席上に延て聞かめしに一夕例の如く六太夫の笛を聽居まか
 曲了り童子六太夫に向て曰く余ハ人間にあらず實ハ此地に住める
 老狐なり今や將に命數尽きて獵人の爲めに生命をたぐるべし願く
 ハ平素の高願に酬ん爲めに古昔源平戦争の狀を演して高覽に供せ

んと言未だ終らざるに座上ハ見るく變して一面の海となり大小
 の軍船舳艫相并んで呐喊山を崩し劍鏃相映し飛箭面を掠む緋甲を
 被ふるもの錦袍を着するもの相撃ち相殺す六太夫魂飛び神往き茫
 然として爲す所を知らず暫くして戦ひ全く了り座上ハ再ハ己の家
 となり童子ハ去て其の行く所を知らずと事稍々怪奇に失れるの嫌
 ひあれども亦以て彼ハ其の妖術の巧みなるを知るへま

神

神即ち靈物拜崇の遺風、世界到處に之を存し従て其の思想の變遷發達の如きも東西の各邦共に甚しき差異なま是れ各地方に存する所の靈物を意味せる言詞に由て察知せらる靈物と、即ち天神、惡魔、佛、鬼、幽靈等を總稱して云ふなり

最始人類の思想に天地間萬象の生滅起伏の一として不思議怪訝の種とならざるなく日月の運行四時の變化の勿論死生禍福等の如き人事に至る迄凡て其の心に解し得ざりし雷電の空に閃き烈風の樹を抜くに至ては不思議怪訝の變えて畏怖恐懼とあり畏怖恐懼は又更に轉して靈物拜崇の習慣となりぬ謂らく是れ靈物の憤怒せるに由る者ならん

斯の如く宇宙間に生起せる現象を舉げて悉く之を靈物の作用に歸す

るに至りしより靈物の種類に従て其數を加へ種々の名稱を以て之を區別するに至れり且つ靈物の各其の分掌する所に由て之を操縱支配する者なりとの妄信は又終に之に向て種々の欲望を祈願するに至れるなり是れ勢の免れざる所にして或は長壽を願ひ或は一家の幸福を祈り禍を除かんことを求め病の癒んことを求む其の願望多種雜駁にして一樣ならざると雖も時として其の目的を達するの奇觀あり稱して靈驗利益と云ふ

靈驗を求め利益を望む者の其の熱心を要すること勿論にしてこの熱心を欠くとき決して靈驗利益を得ることなし故に之に祈願する者の或は水に浴し或は食を絶ち山林に籠り堂宇に夜を徹する等種々の行爲を以て其の熱心と赤誠を靈物に誓ふ
靈物の人の熱心に應じて克く其の願望を満足成就せまひる者ありと

の感念より到處に款待優遇せられ或は其の貌姿を想像えて肖像を畫き偶像を造りて之を堂宇に安置せ或は物を供して盛んに其歡心を買ふに至る

幸福を得て喜ふと云ふよりも禍害に逢ふて疑懼恐怖するの人情の常にして假令學識ありと云ふ人も困厄に逢ふて密に畏怖を抱き痴心兒女に類するの行爲あるの世間往々見る所にて亦是れ人情の弱點なるか如し然れは靈物拜崇の風は獨り兒女愚人の間に止らすして時に社會の上層に迄優遇を蒙りぬ

淫祠流行の風は大に民俗の純朴を破るの傾きあるを以て古來屢々之を禁止したるにも拘らず益々勢を逞ふして其の堂宇殿舎の壯麗結構遙かに國家祖廟の上に出るものあり我國に在て靈物拜崇の風は殆ど端を佛教の渡來に起し其の沿革中多少盛衰ありまに相違あさも漸

次勢を逞ふし應仁元龜天正の頃打續く戦亂の餘響に由て少く其の勢力を挫折せたりしと雖も徳川の盛時に至ては又大に其盛を極めたりし近世に至りて理化學の輸入この習俗に大頓挫を與へたるか如きと雖も是れ又其の一部分に止り社會の大部は依然としてこの靈物拜崇の空氣を以て滿されたり是れ彼の神道と稱する一派の教會及び其他之に類する奇怪なる教法が到處に流行するに由て之を徴すへは此の俗は獨り我國及び他の東洋諸國にのみ行はるゝにあらずして歐洲人中にも亦頗る之に類する者ありスクラフト氏の説に由ればダゴタ民族は田獵に行んとするに當りて先づ靈体と願くは吾を愛せよ願くは何所に鹿のあるかを我に示せよと云ふて靈物を祈ると又彼の古説に傳ふるアポルローと稱する神の守僧クルシースは嗚呼我が神よ吾は曾て汝の壯麗ある屋根を修葺し又常に牡牛若くは山羊の

肥たる股肉を焼きて汝に供せり故に其の報として吾の祈願する所を
 賜許し汝の矢を以て希臘人を射殺し我をして仇讐を復さしめよとて
 祈願したるか如き又彼のラミシースか多くの牡牛を供えたるを以て
 其の報酬として戦争に勝利を得せしめんことをアンモンに向て祈願
 したるか如き悉く是れ靈物に由て幫助を得んことを祈りし者あり其
 他アマズル民族か信する人類を始めとして天体野獸に至るまでを創
 製せしハアンクランクルありとの傳説の如き又同民族か嗚呼アトラ
 ミニールよ吾々をして吾々の得んと欲する者を得せしめよ嗚呼神よ吾
 々を死せしむる勿れ長壽を保たしめよ吾々をして死せしむる勿れと
 云ひて祈願せしか如き其他印度人の願くハ鎧ふたる雷をして吾々を
 救ひしめよと云ひてインドラに祈り或る詩人の一人か朋友よ頌歌を
 奏して乳汁を出す所の牝牛を此の所に追へよと言ふて祈禱せしか如

き實に是れ邦人か今日も尙或る宗教上の主旨に従ひ行ふ所のものと
 更に異なることなし斯の如き妄信に由れるの行爲か單に宗教上の儀式
 に止らすして往々其結果たる靈驗利益を得ることあるものハ必竟心
 力平均の作用に由て信心の感通傳播するに由るからん
 世の一種の宗教家か金城湯池と頼んて物理論者に抗する靈物の作用
 あるものを分拆吟味し來れん多くは此の心力感通の機能の誤信に過
 きさるへし金箔を装ふたる靈体と鰯の頭と其の靈力に於て何の撰お
 所あらん鰯の頭も信心よりどの金言ハ曾て既に哲人の口より漏らさ
 れたり滔々たる迷信の徒ハ問ハす苟も世の上流に立ち宗長を以て仰
 かるもの焉くんぞ省慮する所なくして可あらんや

日本上代の神は靈物よあらす

我上代の神ハ決して今日の人か想像する如き靈物にハあらざりしか

らん今人の神と云へる靈妙不可思議ある能力を有するものありと思
爲するより神と云へる言葉を聞くとき既に心中に畏怖の念を起す
と雖も是れ實に神の性質を誤り神と云へる言葉と靈物とを混同せる
に由る

我國の「カミ」は漢字の神歐洲の「ゴット」等とい大に其の意義を異にし決
して靈妙ある能力を意味するものとあし英人サンハレーンが古事記を
英譯するに當て「カミ」と云へる言葉に適當ある文字なきに苦みたるに
實に我上代の神の性質を能く解したるに由るあり
上代に於て神と云ひし言葉の極めて輕く之を用ひられたるか如し即
ち人と云へる義又ハ公と云へる位の義を以て通常各人間の稱呼にも
用ひ又時として自らも之を稱したることあり例之ハ八千矛神の高志
の國沼河北賣を婚ひに幸行し時沼河北賣の家にとりて歌へれし歌に

自ら稱してやちはこのかみのみことと云々と云ひしか如き又沼河日
賣か之に答へし歌にやちはこのかみのみことと云々と云ひしか如き又阿
遲志貴高日子根神か天若日子か喪を弔ひ給ひし時其の妻其の父等か
天若日子と誤りしに由り阿遲志貴高日子根か怒て十掬劍を拔て其の
喪屋を切伏せ飛去り給ひし時に高比賣命か其の御名を顯へさんと思
ひて歌ひし歌に

あめあるや おとたかはたの
うかかせる たまのみすまる
みすまるに あかだまはや
みたに ふたわたらせ
あぢしき たかひこねの
かゝとや

と云へるか如き又大國主の神が須佐之男命の御所に到り給しとき須佐之男命が大國主の神を見て此者葦原色許男といふ神ろやと謂給ひしか如き皆きみと云へる意に用ひられしを知るへし然れども其の稱呼の最も重く貴く用ふる場合に「かみ」と云ふよりも「みこと」と云ふことを云ひしもの伊邪那美命が伊邪那岐命に向ひての答へに

悔しきかも疾く來まますて吾者黃泉戸喫しつ然共愛しき我那勢命入來ませる云々

の如き又天照大神が天の石屋戸にさしこもり坐せしときの條に天の宇受賣が汝命に増りて云々せしか如き尊と云へる言葉の尊稱の中にも大に重く「かみ」と云ふる言葉の輕く用られしを知るへし至貴曰尊。自餘曰命。並訓美舉登と書記の註にも見へたり然れども「みこと」と「かみ」の單に尊稱の輕重のみに由らすして多少時代に由ても之を異にす即ち

尊と云へるい古く「かみ」と云へる稍々後代に多く用ひられたるか如く思ひる

上代に於ける「かみ」と云へる言葉の單に人又の公位ある極めて輕き義に用ひられしことい前に云へるに由りて之を知るへし尙神議神夜良比神集皆神と云へるか人と云ふ意に通して行はれしを知るに足る加之らす大國主神が其の兄弟に惡まれ玉ひ種々の危難に逢ひ玉ひし時其御祖が汝此の間にあらは遂に八十神に滅されおむと詔給ひし等「かみ」と云へる言葉が如何に用ひられしかを知るへし

上代の「かみ」實に靈妙不可思議の意にあらざるあり然れども其義の漸次に重を加へて佛教渡來以後に終に其の影響に由て全く靈物の義に變し從て支那の神字と同じく靈妙不思議の意に解せらるゝに至れりされは安曆が古事記を録するの當時の既に全く之を一種の靈物

と認め終に上代の人の一般に靈物と思爲せらるゝに至れり故に其名を録するにも配するに神字を以てし勉て古人をして尊嚴神聖のものとせり獨り人類を以て靈物とせしものとあらず中に鳥獸蟲魚にまで神字を冠して之を畏怖するに至る本居翁か「神と云へばと云ひとしくやおもふらん鳥あるもあり蟲あるもあり」と云ひしか如き以て其狀を察するに足る此を以て古傳を讀むものゝ充分に注意するにあらずされど大に我古代の真相を誤り却てその神聖を汚すか如きことあるに至るへし殊に歴史編纂あるものゝ主觀的にあらずして客觀的に之を記すを以て史家か後代より附せし名稱と當時の人か口づから云ひしこととを克く區別せざるへからず古傳の「かみ」と云へる稱呼の如き史家か後代より敬意を以て之に配せしもの少からず是れ殊に注意を要すへきの件なり

上代に在て「かみ」と云へる言葉の如何に用ひられしか又之か靈物を意味するにあらずしことい前に述べたるか如し殊に上代に在て「かみ」をまつる即ち「かみ」に奉仕することい之ありしと雖も所謂靈物を拜崇して吉凶禍福を一向に祈りしと云ふことい少しもあきか如し是れ又靈物と云へる思想か上代の日本人に無かりし明證にして天照大神か忌服屋に坐して神御衣を織らしめ玉ひしの大寶の御式に用ひ給ふ御服を織らしめ給ひしものにして決して靈物祈禱の祭場に用ふるにあらざりしあるへし又神武天皇か鳥見の岡に皇祖天神を祭り玉ひしことあるも是れ又皇祖奉敬の天意にして決して靈物拜崇の陋習にあらざるなり崇神天皇の御時伊迦加色許男命に仰せて天之八十羅訶（あそろか）を作りて天神地祇の社を定め奉り給ひ其他種々敬神の事ありしも是れ亦皇祖皇宗を始めて代々の皇靈に奉へ給ひしに由る然れども

この御代にハ恰も疫病多く流行せしを以て時に靈物拜崇にあらざるかを疑ふものあれども是れ大なる誤りなり其の奉する所實に皇祖皇宗に外ならず故に此時代にも未だ靈物思想ハ起らざりしなり

靈物思想の起りしハ實に佛教の渡來に基く加ふるに神と云へる漢字の「かみ」ある言葉に誤當されたと相合して靈物の感念ハ漸く邦人の心裡ハ發芽し其の心に解せざるもの又ハ不可思議あることハ擧て之を靈物の力に歸し靈物ハ絶對無比の大能力者として宇宙の大主宰者と仰かれ人類ハ此の靈物に由て創造せられたりとの誤解より我遠祖伊邪那岐命伊邪那美命を以て先づ靈物の一に加へ從て上代の人の悉く之を靈物と誤認せらるゝに至れり茲に於て祖宗敬崇奉仕ハ變して靈物拜崇の祈とある既に日本後紀弘仁四年の條にハ奉幣於名神報豐稔也と見ゆ弘仁ハ如何ある時代そ空海新に歸朝して盛んに佛説を廣

め靈驗奇瑞頻りに行はれて社會ハ殆んど靈怪不思議の思想を以て滿されたるの時なり故に時に災害の起ることあれハ直ちに之を靈物の作用に歸し恐怖畏懼して一向に其怒りを解んことを勉めたり加之に佛家因果の説化身垂跡の議ハ陰陽道の鬼門金神の説と勢を合するに至りて奇怪ハ更に奇怪とあり不可思議ハ又不可思議を加ふ此の思想ハ後代中御門家吉田家の繁榮とあり引て今日に及ハ終に一種の類宗教的のものを現するに至れり

佛教の靈物思想と漢儒の所謂天ある感念及ハ神字の誤當ハ端無く我上代の有様をして誤解せしむるに至りし原因となれり恰も儒佛合成の色目鏡を以て上代を窺ひしか如し翠色掬すへきの老松も妖艶然んとする花も山も川も果てハ家までも彼の色目鏡の色に變したるに異ならず其影響ハ終に高天原をも天上の一界となすに至れり

斯の如く「かみ」其真相を誤られたるも共に種々の名稱を以て之を區別せられし後村上天皇の朝に源順の著せる和名類聚鈔に「鬼神部を立て其内を神靈鬼魅の二類に分ち神靈部に「天神、地神、人神を収録し鬼魅の類に「鬼、邪鬼、虐鬼、窮鬼等の如き種々のものを集めたり今之を記すれ」

神靈部

天神 地神 人神 心神 天一神 大白神 海神 河神 水神
山神 樹神 道神 岐神 道祖 産靈 保食神 稻魂 幸魂
靈 現人神 旱魃 土公 雷公 電光

鬼魅部

鬼 邪鬼 虐鬼 餓鬼 窮鬼 魍魎 魍魎 醜女 天探女

其の類別の奇異ある亦以て當時靈物思想の盛なりを察するに足る

轉して古來學者か神と云へることを如何に解せしやを見るに各々其の见解を異ふを或「かみ」上にきて頂上の意ありと云く「かみ」等皆其轉語ありと云ひ或「かみ」くしびの轉語なりと云ひ或「かみ」牙ありと云ひ其他日本上代に「實在の神と理想上の神と二種ありし」と云ふ等種々雜多にして未だ一定せる確論あることなし然れども「かみ」上ありと云ふか如き「四聲の變化に注意せざるものと云はるへからず殊に「かみ」の轉語ありといへども恐く「かみ」こそ却て「かみ」の轉聲に「あ」らざるか「きみ」と云へる言葉「神よりも遙かに古き言葉にして即ち伊邪那岐尊伊邪那美尊「誘君及ひ誘女君あるを以て「きみ」なる言葉の最も古きを知るその鬼も角も茲に「かみ」の意義に關する二三の解釋を掲げて讀者の參考に供す

本居翁の説に由れ「神」數多の差別ありて貴きもあり賤しきもあり

り強きもあり弱きもあり善きもあり惡きもありて心も行ひもその様々に随ひてとりくにしめれぬ大かた一ひきに定めかたしと平田氏の曰く神とい日本書紀の卷首に古天地未剖判陰陽不分渾沌如鷄子溟滓而含牙と云へる牙是れなりかびのかい彼の意にて物をそれと指して云ふことびの靈妙なる物を云ふ語ありかびのかびと同しくかぶと讀み又かむとも讀む頭大きく下細き形を云ふ頭槌かうちの劍鏑矢などのかぶと同言あるか(中略)其のいと奇しく妙ある事を稱へしより及ひて造化の事にあつかり玉ふかみたちの中すも更なり凡て世に奇しく妙なる功德あるものをかみと云ふ云々かみと云へる言葉を誤りたるの靈物の思想に原因すれども高天原を天上の一界と思爲せるも亦一の原因たるならん左に余か高天原考の中一二節を抄出きて參考に供す

高天原を以て佛家の天堂と同じく天上の一世界と思爲するの輩は語るに足らずと雖も近世大に勢力あるの彼の高天原を以て一の邦國とあすの説あり其の何の地方なるやと云ふの暫く措きこの高天原國説こそ最も事實に近き説ならん(中略)然れどもこの説も亦史家か理想的を以て記せる彼の神傳と高天原時代とを混同せるの跡をまよと云ふへからず殊に其高天原を海外の一地方ならんと云ふに至りては頗る窮説たるの誹を免れざるへし

上代の歴史を説くものの古事記日本紀等の記事に餘りお信を置くこと深きに由りて却て其實を誤る者多し我古傳の固より其始め文字ありて之を記し置きたるにあらず僅に口碑に由りて之を語り傳へたるものあれば多少の誤傳あるは免れざる所あり加之其の必要の傳説にして忘却せるものもあるべく又傳説の順序の前後を或は

重複せるものもあるならん古事記の如き其編纂の當時既に傳説の漸く誤り多きを以て種々に注意えて事實を探明せられし事は天武天皇の詔に由て明かなり其詔に曰く

朕聞諸家之所貢

帝紀及本辭既違正實多加虛僞當今之時不改其失未經幾年其旨欲滅斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉故惟撰錄帝紀討覈舊辭削僞定實欲流後葉云々

此詔に由ても當時己に古傳に誤りの多かりを知るに足る(中略)諸冊二尊以前ハ實に逸たり之を考ふるに由なし其の記する所亦甚た詳かならず古傳の記する所に由れハ國常立尊より諸冊二尊までを神代七世と稱すれども余ハ諸冊二尊以前を神代と云ふことの適當あるを信す二尊以前を神代即ち理想の時代と云ふ二尊を始めと云其

の以下を高天原時代とせば史を讀むに於て大に便なるを見る二尊ハ實に我國人類の始祖にして又邦土開闢の始祖なればあり高天原ハ何れの地方あるやハ頗る議論多きことおれども恐くハ四國又ハ四國沿岸の一區域なりしあるへしこハ二尊ハ先づ淤能許呂島に入尊殿を見立給ひしと云ハ淡道の穗之狹別を生給ひ次ハ伊豫の二名島を生給ひ順次に四國を開き給ひしか如き其他この神に關する舊跡の四國近傍に多きを以て之を徵すへし又冊尊崩御の時紀伊國熊野の有馬村に葬祭したりと云へる傳説に

有馬村有産田村即伊邪冊尊神退之地而其東有隱窟又曰花窟所葬伊邪諾岩窟也每歲暮春以繩作花及幡旗圍繞於窟歌舞祭之蓋往古之遺俗也云々

其他延喜式神明帳に載する所の淡路國津名郡淡路伊佐奈岐神社ハ

即ち二尊を祭りし者にして是れ隱居の地なりと云ふ其の傳ふる所
 多少の相違あるも二尊經營の跡を考ふれば高天原かこの四國近傍
 かりまことい蓋々疑ひなきの事實なり殊に出雲其他附近の地方よ
 り高天原へ往來の頻繁ありまの一層之を確むるものなり(中略)高天
 原の天上の一界にあらざりしことへ前に述べたる所に由て明かな
 るへまど雖も更に之を証せんと欲せは須佐之男命か高天原に上り
 來せるとき天照太神か心善しき心ならし我國を奪はんと欲ふに
 こゝろと詔給ひしを以て明かなりこは實に高天原と他の國々と接續
 せる證據にしてくにと云ふ言葉の境界と云ふ意あり縣居翁の説も
 もくにと云ふ名は限の意なり東國にて垣をくねと云ふにて知るへ
 しかゞれば地の天と等まゝ廣く國の限りわれと狭きに似たり云々
 (中略)然り而して彼の下り又い上ると云ふことも必ずしも天上と地

下の意にあらすして現に今日にても帝都を中央と定めて之に遠か
 るを下りと云ひ之に向ふを上ると云ふにゆらすや(中略)然り而して
 天孫降臨即ち日子番能邇々葦原の日向の國に移り坐すに及びては
 日本の政廳へ分れて二つとなり四國の高天原政府と九州の高千穂
 政府に分れたり是れ當時の政略上恐るゝ己むを得ざるに出たるも
 のにして恰も高千穂政府は高天原政府の出張所の如き觀ありしか
 らん故に政事及び他の人事上の事にして高千穂政府の決し難きも
 のあるに及んてい必ず裁決を高天原政府に諮詢せるものゝ如し高
 千穂政府開設に就ても随分面倒ありま事の時々大國主尊と交渉あ
 りしに由ても知らる然り而して天孫か何故に日向の高千穂に御移
 轉ありしや其の理由い之を知ると能はずと雖も恐るゝ此の日向地
 方い未だ定りし領主なきと人民の餘りに繁殖せざりしを以て恰も

今日の殖民地を開くか如き政略に由りしものからん該地方か無人
 荒漠の地たりと云ふことい古事記天孫降臨の段に於是脊肉韓國を笠沙
 之御前に眞來通て詔之此地ハ朝日之直刺國夕日之日照國なり故此
 地を甚吉地と詔給ひて云々韓國ハ借字にえて、から國即ち空虚國の
 義にして紀に云ふ所の空國あれハ當時此の日向地方の無人荒漠の
 地たるを知るへきなり

天孫ハ高天原より船出まし、て四國の沿岸より大隅の外海を繞
 り日向に御安着御上陸ありて此の高千穂の地勢高燥にして皇基を
 固め玉ふへきの地たるを相してさては此地に宮城を見立給ひしも
 のならん古傳に御船出の有様を記して

故爾天津日子番能邇々藝命天之石位を離れ天之八重多那雲を押分
 て伊都能知和岐知和岐手天浮橋ハ宇岐士摩理蘇理多々斯天筑紫日

向之高千穂之久士布流多氣に天降坐しき實に御船出の有様の勇壯
 なりとを想ふへし(天浮橋は船なりとの古説あり大によし)されは我
 上代の歴史ハ所謂神代を別にして之を三期に分つことを得へし曰
 く高天原時代曰く高天原高千穂兩立時代曰く高千穂時代即ち是れ
 なり高天原時代の末ハ高天原高千穂兩立の時代にして皇化の東漸
 と共に高天原政府ハ終に神武の高千穂政府と再ハ合同歸一せり即
 ち我國の開化ハ一ハ已に高天原時代に於て四國を中心とえて中國
 南海に及ひ一ハ高千穂政府の開設と共に九州の東端に始り漸次東
 に及ひたりと云ふへし(中略)高天原を以て天上の一界となすものハ
 空想に馳せ又之を海外の一地方となすものハ日本上代の形勢に疎
 きものなりと云ハさるへからず

即ち「かゝる支那の神又ハ「ゴツト」の如き靈物にあらざりしも種々の變

遷に由て終に一種の靈物の如く看做されまこと前に述べたるか如しこの變遷の移行の終に神道なる一種の宗教類似物を化成し來れり此の神道なるものの實に、かゝる誤解靈物の迷想を以て造られたるものにして其の説く所亦頗る奇怪なり神道の語に己に遠く藤原兼良公の日本紀纂疏の中に見ゆ後又種々の沿革を経て唯一神道とあり兩部習合神道となる唯一神道とい天道の即ち人道也人道の即ち是天道也天人唯一あるか故に唯一神道と云ふ天人唯一の理を窮めて立てたるに由り一に之を理學神道と云ふと且つ唯一神道にも新舊の二派あり舊派の唯一の表の佛道を現はさずして裏面に佛家の金剛界胎藏界顯密教など云ふ佛理を以て造ると雖も表面の唯一の神道なるを以て唯一神道と云ふ又新派の云ふ所の全く佛法を除きて心學理學を以て造りたる天神唯一の道ありと兩部習合神道なるものの彼の本地垂

跡に由て成る其他尙神道の種々に分立し各其の見る所に由て異説を立つ然れども要するに佛説を加味したるものにあらされ心學を取捨したるものに過ぎず近世に及んで神儒佛合同主義あるものを唱ふるものあり彼等の凡て我上代の歴史に諸種の理説を配劑したるものなるを以て其説く所頗る奇異あり神道の三部經と稱へしもの天元神變神妙經、地元神通神妙經、人元神力神妙經即ち是れあり之を以て佛家の三部經に擬せんと勉めたり且つ又千度の経、萬度の経等と稱して経の詞を繰返し讀み穢れを拭ひ清むるとなると然れどもこの経の詞の實に朝家二季の経に用ふる所にまて之を通常人民が病難災厄を解除せん爲めに濫用するに大に不敬の所業たりしを免れず然れども當時更に之を怪むものなかりま其他六根清淨の経無上靈寶神道加持の詞等種々あれども概ね牽強附會して佛家の經典を擬せしむ外あらす獨

り其説く所の奇怪なるのみならず其の行ふ所も亦頗る奇怪にして絶倒抱腹兒戯に類するものゝみなりし近世に及んで稍々此陋習を去りたるか如しと雖も尙其説く所の奇怪暗愚の陋見のみにして其行ふ所亦文化の進歩を妨ぐるものありとせず即ち或る一種の宗教に其の會堂の上に鉄製の棒を渡し是れ天の浮橋ありと云ひ信徒をして之を渡らしむ又心魂を授くると稱して紙上に天照太神と書したるものを取て之を把持し信徒をして之に觸れしめ暫時にして温氣を感じるに至れり即ち神魂の通したるありと云ふ其他神水と稱して水を病者に與へ或は吉凶禍福を卜する等昔日の兩部神道よりも甚しきものあり是等ハ口を極めて基督教の妄を誹れども其の自ら説く所のものハ更に此の基督の奇跡なるものより甚しきものありその偏見笑ふべきなり試に彼等か教會堂を見よ彼等か神聖なりとして拜崇する所の靈堂ハ

靈物非靈物の雜居地にしてその殿堂ハ和漢洋及び印度折衷の裝飾を以て裝嚴を装ふの奇觀あるあり信教の自由ハ他の之に關涉する所にあらず加之熱心と心力の感通ハ時に一種の變象を呈するを以て假令彼等ハ如何なる行爲をなすも差支へなしと雖も其の靈物に皇祖皇宗の御名を配え皇祖皇宗として彼等の手に玩弄せまひるに至てハ實に不敬の甚しきもの決して恕れへからざる所なり嗚呼之を信するものと愚ハ寧ろ憐むべきもの之を説くものハ心事ハ惡むべし以上掲けたる所ハ是れ昔日の所謂神道なるもの決して今日の神道を云ふにあらずるあり今日の神道ハ宗規大に整ひ管長ありて各之を統轄ハ管長ハ悉く德行高く學識博き人なり故に今日の神道ハ之を昔日のものに比するにその文野蓋し日を同ふして語るへからず

幽靈

理化學の輸入に慥に幽靈の區域を狭めたり然れども其の有無虚實の論争は未だ全く其跡を絶ちたりとは云ふへからすこの獨り我國のみならず歐洲諸國に於ても然りとあす即ち幽靈鬼神に關する著書の詭多あるを以て之を證すべし

迷信に依れるの幽靈談は人智の進歩に従ひ漸次其數を減すべしと雖も其の迷信によらざる者即ち眞の幽靈に至ては人智の開發に従て反て益々其光を放つに至る如何とあれは古代の幽靈は全く只迷信に由りて現はるゝ所の幻影即ち非幽靈も眞の幽靈も混同して單に幽靈と云ひ來りしものあれば學理に由て之を分拆類別すれば非幽靈は消滅せ眞幽靈は残るべし例之鹽と砂とを一器に盛れり二つなから白くして光を放つこと頗る相類似せるを以て人之を砂と云へるも若し之に

水を注加して振攪するとき鹽分の溶解し去りて砂のみ殘留するか如し故に幽靈の學理の説明に由て其實存を確め非幽靈の學理の調査に逢て溶解融去すべし蓋し非幽靈といふ幽靈の如く見ゆるのみにして其實幽靈にあらずる者なり例之暗夜に白衣を認めて幽靈とあし燐火を認めて幽靈とあし其他蘆の枯穂荻の上風悉く時に幽靈と誤認せらるゝか如きを云ふ殊ふ多く見る者の精神病者なるか又の想像の非常に旺盛ある時の如きこれなり古より幽靈の恐ろしさものゝ一に數へられたり幽靈の出る場所の寂寞たるも原因の一あるべく又幽靈の現出する時刻の半夜人定時なるも亦其の原因あるべし然れどもこの怪談的の幽靈又の彼の非幽靈出現の原因とあるべきも誠の幽靈に何の關係もあらずるなり幽靈の正体見たりかれ尾花と云へる古人の口吟の非幽靈か如何に外圍の狀況と場所に關係を有するかを穿

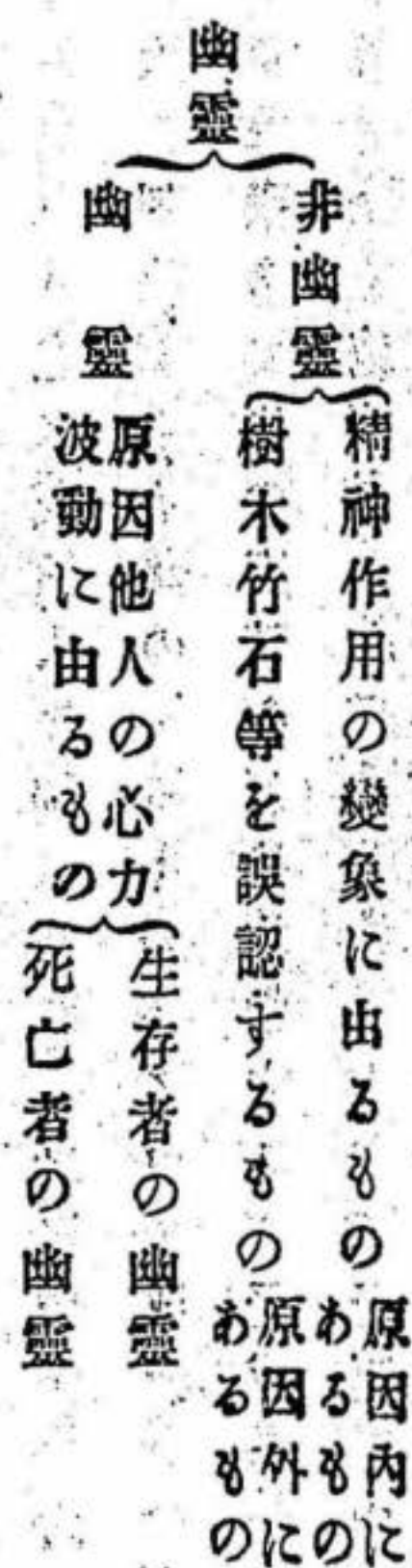
ち得て妙ありと云ふへま

斯の如く幽霊(誠の幽霊及び非幽霊)の出現か時と場所に関係して大に人心に畏懼の感念を起さしむるものなりと雖も其の畏懼の重因ハ不思議と云へる思想か實ハ幽霊に畏懼の感念を伴はしむるものたらざるへからず實に不思議あり一たひ死せるものか又現はれて我目前に其の形を見せんといふ千思萬考するも其理を解し得ざるよりさてハ不思議ハ轉して疑惑とあり疑惑ハ再轉法て恐怖の念とあるに外ならず如何に幽霊ハ人心に畏懼の感念を興へたるかは假令之を安排するの徒と雖も秋雨の蕭々として窓を打つ夜青燈に對して幽霊談をさせは多くは心中に恐怖の情を起すものなり然れども是れ古來の傳説を耳にするても久しきと所謂怪談的の幽霊を幽霊と混同するに由るものにして誠の幽霊ハ斯の如く奇怪あるものにあらす又恐ろしきもの

にもあらざるあり故に白晝にも出つへく半夜にも出つへく座間にも來るへく林園にも出つへく決して時と所とを撰ふことなし即ち現ハるへきの道理ありて現ハれ來るへきの理ありて來ることを知れハ幽霊の出る何の不思議なることかあらん又何の恐ろしきことかあらん其理を解せざるより不思議となり恐怖となるのみ
圓山應舉一たひ幽霊を畫きてより幽霊の凄愴ハ更に凄愴を加へたり頭髮長く垂れて顔貌凄衰し白衣腥氣を帶ひて冷酸骨に徹し見る者をして膚肌粟立するを覺えしむるものハ畫工筆勢の妙を極むと雖も之に由て又大に幽霊の眞狀を誤られたるか如し我國に在ても中古以上の幽霊の形容ハ全く斯の如きものにあらざりしかり
幽霊ハ實に心力の感傳に由て起る所の幻影なるか故に獨り死後に於てのみ現るものなりものにあらすして生前にも亦現出するものなり否寧

ろ死後よりも生前殊に死に瀕するとき等に現はるゝもの多きか如し
斯の如く其の原因ハ心力の活動に由るものあるか故に幽霊の當時の
感情如何によりて或ハ恐ろしき狀貌を以て現はれ又悲哀ある顔貌を
以て現はるされハ幽霊ハ世人の想像せる如く必しも悲愴凄酸あるも
のゝみにあらずして見て嬉しきものもあらん又慕はしき者もあらん
幽霊ハ二種の區別あることハ既に之を云へり即ち幽霊及ハ非幽霊に
して一ハ眞の幽霊にして一ハ類似の幽霊あり類似の幽霊ハ又之を二
種に區別することを得るあり即ち一ハ精神作用の影響に由り諸種の
感覺に異常を起シ終に無實の感覺を惹起するに由るもの及ハ精神病
に罹りたるもの一ハ外圍の狀況に由て所在の木石器具等を誤て幽霊
と認る者は是れあり共に是れ認識の錯誤に由て起るものにして類似の
幽霊なり眞の幽霊ハ外來の心力波動の刺激を感受し始めて起る所の

ものにして其の原因全く他に存するものあり故ハ類似の幽霊殊に其
の精神の變象に由るものハ其者一人のみ之を見ることを得へきも他
人ハ之を見ることなく眞の幽霊ハ幽霊本体の心力如何に由て何人に
も之を感ずるものなり



心靈の妙機ハ一種の活動を起して波動に由て轉傳感通し甲乙彼我の
間を連貫一致するものなりこの靈妙なる心靈の活動ハ最も思想の強
鋭敏活なる際のみ發起するものにして心思の微弱沈衰せる時にハ
決して此の妙機を見ることなし此を以て心力愈々強鋭なれハ從て心

機を感傳すること愈々強く之に反するときは心機感傳の作用從て微弱となる精神一到何事のあらざる心力一たび強銳に活動するとき何事か其の目的を達し得ざるべき從てこの機動の物に觸れて種々の現象を呈するものあり觸るゝ所に由て各其の現象を異にする草木に觸るれば草木之に感ぜ人に觸るれば人之に感す例之の同一の物を以て身体を刺戟するも其の觸るゝ局部に由て感覺を異にするか如し心機一たび動きて他の腦髓を刺戟衝動するや受感者の腦裏に一種の異常を起し全く施感者の心思と一致平均して受感者の腦髓に即ち施感者の腦髓の如き觀を呈し甲の思考すること乙も亦之を思考するか如く形影相伴ふに至る斯の如くまた受感者の心力に施感者の思考する悲哀憤怒愛戀等何に由らそ其の思想を感受充滿するを以て心の動く所終に五官機に變象を來し其の變象の動く所の思想に從て或の

恐ろしき影像を眼中に畫き或は悲しき相貌を目前に映し怒れるもの恨むもの嬉しきもの愛らきもの千態万様なりと雖も要するに施感者の心思如何に従ふものなり是れ實に幽霊の真相にして幽霊自らの思想に由て其の幻影の一樣ある能はざる所以あり幽霊を以て一概に凄愴なる狀貌なりと思爲するは大なる誤りなり幽霊は猶思想を複寫せる寫眞の如きものか

夫れ然り斯の如く幽霊は一種の感通作用にして心力平均に基くものあれば前にも云へる如く死後の人のみ幽霊の現はるゝものにあらざるまゝ其の幻影を現はすものにして世俗に云ふ一念凝りたるとき其の姿の姿の見ゆることあり故に其の姿の如きも相貌こそ其の情感に由て種々移れ決して長髪白衣の怪狀に由て現はるゝものにあらす

して多く其人平時の容姿に由て現出するものなり
 人の心力の最も強銳にして固結するの嘻樂の感情よりも怨恨憤懣の
 感情あり殊に死に瀕して起る所のものの一層強烈にして且つ多くの
 悲憤怨恨等に關するものあるか故に其の思想に従て状態に恐るゑく
 又の恨めしく現はるものあらんこれ獨り幽霊に於てのみ然るにあ
 らずして平日は在ても憤怒の心内に動くとき自ら之を相貌に現
 すの日常人の目撃せる所あり
 以上述べたる所を再言すれは幽霊の甲の思想の動機を乙或は乙及び
 丙丁等に感受して腦髓に一種の變象を起し從て其の影響視覺に及ひ
 終に其の幻影を現出するものあり人或は云ん生前に在りては心力の
 波動を起すへの動機を有せしきも已に其人死きて動機の根元たる精
 神全く枯死したる後に於て何ぞ心力の波動を起すことあらんとは是れ

一應道理ある疑問なり然れども一たび起りたる波動のたとひ其の動
 元の既に滅するも其の餘響を他に傳へて之か平均を得るにあはされ
 は已まざるあり例之の金線を緊張きて其の一端を打つに其の打力の
 既に去るも猶其の波動を他端に傳達するか如し故に死後に至りて幽
 霊の出現するの游離の心力の平均を求むるに基因するものあり
 死後の幽霊は猶游離せる電氣の如し其の平均を得るに至るまで何
 時までも其力を逞して他を刺戟し以て幻影を現はすものあり幽霊の
 其の死後に現はるものと生存中に現はるものとを問はす幻影當
 体の意思情感等の心性作用を有するものにあらざるあり是れ其の原
 因の心靈の活動に由て起るものありと雖も已に一變して心力なる一
 の物質的作用となり再變して一の幻影とされるものなればあり
 生存中に現はる所の幽霊は其の原因たる或思想の休止すると共に

心力波動も亦其力を消滅し従て幽霊の又現出することおし即ち甲者が深く乙者を怨恨するか又深く憤懣を抱く等の爲に現はれざるものとすれば其の怨恨又憤懣の解くると共に幽霊の其形を滅するものあり死者の幽霊に在ても亦其の生前の願望を満足するか或は怨恨の解くる方法即ち心力の平均を得せしむるに至れば終に其影を收む必竟死者の心力が遺留游離せる所以のものに實に或希望又目的を達せんとするにあるものなればこの游離の心力を平均中和せしめ了れり其の心力不平均に由て現はるる現象に従て雲散霧消するの當然の事理にして彼の宗教家が行ふ所の祈禱又施餓鬼と稱するもの實にこの心力の平均を謀るに外ならず

人の心中に常に種々の慾望感情の往來浮動するものにして其の心思の集凝固結する所滿身是れ其の慾望を以て作られたるかを疑ふも

のあり殊に憤怒怨恨羨望等の如き或感情は執念きはあし恨骨髓に徹すと云ふか如き又悲憤腸を斷つと云ふか如き皆以て是等感情の強鋭固結せるを思ふべきあり婦人が嫉妬に由れるの執念金錢上の慾望に又更に深し是等の一念殊に死に瀕して一層強鋭となるものあるか故に嫉妬深き婦人の死後強慾ある老婆の死後等に幽霊多き其の心力波動の遺留せるに由るものなるへし

凡そ幽霊にして其所謂非幽霊に属するもの多く一人にのみ見得るものありと雖も眞の幽霊に在て其の死者の幽霊と生存者の幽霊とを問はす何人と雖も一たひ其の心力を感受したるもの皆之を見ることを得へし是れ實に其の原因の他に存在せる所以なり

以上凡そ幽霊の性質を述べ終れり然れども幽霊あるもの決して屢々現はるる者にあらすして稀に見る所の現象なるか故に世の幽霊を

して細かに之を調査分析したらんに十中の八九は無稽の談たるに過ぎざるべし然るに人の奇を好む奇上奇を加へ怪上怪を添へ以て此の説話を針小棒大にす苟も之か研究に従事せんとするものゝ先づ充分に談話の事實なるや否を調査せざるべからず否らされり大なる誤謬を來すことあり

左に記せるものゝ幽霊寫眞と云へる一話にして幽霊を寫眞せし試験の演説あり此の記事の二十六年六月八日及九日(六千四百八十七、八両号)の日々新聞を読みし人ゝ其の紙上に幻夢庵と云へる人が評論の評論より譯出せしものを掲げたれば己に一讀せし人もあらん其の説く所頗る奇怪なるか如しと雖も記きて以て參考に供す而て此の演説者ハセー、トレール、テールと云へる人なりと云ふ

滿堂の貴女紳士私に數年來幽霊寫眞のことに付ての研究いたしま

したか未だ實際に試験するの機會を得せんとてまた所かグラスゴ
1の名高い幽霊使ヒデー、チユギッド氏が偶々當倫敦に見えましたから私のおの機會に於て或友人に紹介せられて同氏に面會いたし
ました而して同氏に請ふて實驗の爲めに數日間逗留して貰ふこと
に取極めました扱愈々幽霊か寫るか否を實驗する前に互に約束し
ました第一の要件の道理上あり得べからざる事として充分懷疑心
を以て吟味することでありましてヤユギッド氏も私に欺術を行ふ
ものと假定きて出来る丈嚴密に研究して下さいと彼自ら快く申し
ました

試験の場所ハダルスストンのある野菜料理店でありまして其の寫眞
室の試験にハ申分のあり……即ち露程も欺術の疑ひを容れられ
ぬ程満足なる部屋でありまして何一つ疑の種とあるものもありま

せんでした此の試験場に臨むたるものゝ幽霊使ひのデュギッド氏
と私の外立會人として監督協會の會員學術院の卒業生各一人とド
クトルケールグラスゴーの商人二名并に此の料理屋の主人であり
まして怪しきものゝ居させんてした

初試験に用ひました寫眞版の勿論のこと其他此場所にて用ゐます
る道具は一切他人の手を借りませんで私が持運びました室内の私
か殊に注意して四方八面嚴重に吟味いたしましたか固より怪むへ
きもの毛程もありませんから用意の道具を仕掛まして率と云ふ前
に私の例の如く黒い覆を被りて試に向ふを覗いて見ますと何もの
も目に遮るものもありませんから是ならぬよもやと心に思ひなか
ら形の如く口をとりまして瞬間に塞いでしまいました夫から種板
をぬき取りまして半信半疑で闇室に入りまして洗ひ始めました所

か不思議です實か不思議です幽霊のしめやかを委してありくと
寫つて居りました而もこの幽霊の一箇の貴女でありました
其後度々の試験の同じ結果を得ましたか其幽霊の顔の私始め誰も
何人であるか見覚えがありません多分我々の知らぬ人の幽霊に相
違ひかと思ひます殊に其幽霊の顔と云ひ容と云ひ十人か十人皆違
ふのみならず似寄たものもないものゝ不思議であるか但た
其の時に寄りまゑて鏡面の中心に現はれ又一寸隅に現はれ或は
鮮明に或は朦朧と現はれた違ひがあるばかりです

私の第一の試験の時即ち前に云ひました貴女の試験の時幽霊使ひ
のデュギッド氏に向ひまして幽霊の寫る瞬間の如何な感で居る
かと尋ねましたら同氏の只恍惚とて夢路を辿るか如くニコース
トンとグラスゴーの間を駛れる瀛車中に在て一隅の席を得たしと

思ひ居るのみと答へました

夫れより幾度の實驗を積まして幽霊の姿の色々様々に顯はれます所より段々穿鑿しきそれの畢竟カメラ即ち寫眞鏡の幽霊を寫すに必要でないことを發見しました今其の一つに就て云ひます。これの通常の人間と幽霊を一所に寫しきまた同じ寫眞を幾枚も燒き取りまするに人間の素より一定の位置に居りまするか幽霊の位置か違ひます。假令一枚の方の幽霊の姿の人間より高き所に移れば外一枚の人間より低き所にありますこの事實より推考しますれば幽霊の決えて先づ寫眞鏡に映寫するものてなきことか知れます而してプレート即ち寫眞版に直ちに寫るものと信するの外は移りません

幽霊が直ちに寫眞版に寫る道理の未だ全く知れません或は幽霊の

思想が凝結して……幽霊の思想と云ふては少しくを可笑様です如何にせよ靈の固りか人の姿で顯れるのであるが又幽霊を寫すに寫眞鏡の必要でないと思ひますか尙日光其他の要用物の幽霊寫眞に限り必要でないか否につきましては未だ克く分りません寫眞鏡の必要でない事の前日も一言云ふたか尙一つの實話がありますから序に申さしよう夫の幽霊使ひザユギツド氏かタルストンの野菜料理屋を出立する際に臨みまして家の主人……即ち私が試験の立合人にたのんだ一人てありますか……一の寫眞版を携へましてザユギツド氏に向ひ暫時之を以て闇室に入り呉よと述へましてザユギツド氏の快く承知して闇室に入りました凡そ三分時を経まして家の主人の體で形の如く藥を注ぎ初めすると思議や一人の男幽霊が顯れました其の容貌如何と凝視すれば圖ら

さうき數日前私が試験しました時寫つた男幽霊と全く同一であり
また尤も誰の顔とも更に見覚えのありません此の實驗が就きま
して此家の主人の受合て云ひました彼のチユギツド氏に一寸も
たせたる迄にして寫眞版に指の頭をも觸れさせませんでしたと
實際の試験の大概この通てありますか其の成績の如何と云ふに殘
念ながら私の不可思議なる問題をまて益々不可思議ならしめたり
と答ふるの外にありません併し私の實驗に於て多少此の問題を考
究するの便宜がありませうは實に望外の幸であります

此の實驗の頗る奇怪なるか如しと雖も心神の作用上亦決まておし難
きにあらざるへし佐鳥某ある人頗る神理を解し能く心力を以て人を
制す其妙殆と神に入る此人時に神体を拜せしむると稱して種々の神
体を現することあり其法先づ信者を清寂なる一室に誘き入れ數人整

然祈禱せよめたる後其の鎮魂するを俟て默禱一番すれは種々の神体
を空中に現す之を拜するもの感銘肝に徹すと云ふ而して信者をして
一人つゝ順次別室に出して拜せし所の神体の模様狀貌を尋ねるに各
人悉く一樣あり是れ或は前記チユギツド氏の幽霊と恐くは同一の理
因に由るにあらざるか

淺草七軒町に余が知人あり此人のものと美濃の人當時來て此所に住
むものあるか曾て此人が郷里にありして召遣ひし下僕忠助ある
ものあり今の年老ひて六十五六才あるへし其の性質の忠實ありし
より時々家内の人々も彼かことを語り出て其噂をなほことありし
に一日突然彼の忠助七軒町の寓居に尋ね來りしに珍らまき人の
尋ね來ぬるものないたく年老ひしなど種々談話おとし茶菓など
持出てゝゆるゝ休息して府下の見物もすへしとて打語るあいた

彼ハ便所にや行きたりけんつと立ち出しまゝまでともく歸らざるよりそこゝたつね求むれども影たに見へず田舎人のことゝて物珍らまきまゝ立出て途にや迷ひけんおと種々心をいためてまじしに終に其日の暮る頃までも歸らざりしに家内の人々如何おとからひてよかるへきなど云ひあへるそれより二日目の夕方に一通の郵便來りて忠助永々病氣の所此程死去したるよし申越せしかは人々大に驚き怪み先日忠助ハ必定彼ハ幽靈なるへまざるにても日中に幽靈の出るも奇怪ありとて此の由を書面もて彼の家に問合せしに更に出京したることおし併し忠助の娘あるもの當時いろはと名稱りて芳原の某樓にある由返事來りければ彼にも逢んとて彼の幽靈來りしならんかと彼女にもこの由かたりて厚く佛事を行ひ彼の幽魂を慰めたりとぞ

同じ人の前に家永某と云ふ小學教員住みけりこの教師の妻なるもの病にかゝりて打伏しけるか常に極めて温和の人なるに病にかゝりてのちハ稍々嫉妬の心出て若し妾あくなりし後ハ良人の好き妻迎へ玉はんあねたましなど云ひ出ることも屢々なりまか愈々身まかる前あなりて突然床の上に起直り恐ろしき顔してあなうらめし妾死おは良人の必ず好き妻迎へたまはんと氣色をかへていひけるにそ教師心におそれを抱きゆめくさやうのことハすまま安心せよと慰めければ妻大に喜びて嬉まき笑みをもらせしかそのまゝみまかりける始の程ハ教師も獨身にて暮せしか日をふるまゝ人も妻を迎ふることを勧めければ千住某所に恰好の女子あるよしをきゝ媒人同道彼の家に至りて見合しけるに歸りより教師大に發熱して悶へ苦みしか二三日にて全快しければ程無く彼の女子を迎へ

て家の妻となしぬ然るにこの頃より家内に不思議起りて毎夜亡妻の姿現はれて夫婦の眼に見ゆるより教師のいたく驚き恐れこの家を立退きて他所へ引移りしかはこのことを知るもの更に無かりしか暫くして彼の教師の住みし家へ引越し來れる人あり不思議にも毎夜怪しき婦人の來るに由り始めの狐狸の所業あらんと思ひ之を追拂ひしにこの姿の現はるゝこと少しも前にかはることなければ茲に始めて幽霊の噂たかく彼の教師の亡妻の幽霊ならんなど云ふより終に其人も此の家を立ち去りしか來る人々皆この幽霊の姿を見たりと余か彼人を尋ねた時其の家は明家となり住人もあかりし又之と殆んど同じ話あり其の談話の確實なるまゝ茲に記す府下屈指の會社に永田某と云ふ取締役を勤むる人ありこの人性來花柳の遊を好みて常に其家にあることも希なりしか新橋某所の藝妓にて

小花と云へるの永田の二なき愛妾にて子に生みける永田の妻の之をさうて最とくやしきことに思ひ居る彼の小花を遠くすることを云ひけるかさすか夫の子あればにや彼の小兒の時々我家にも呼び入れわか子の如くに愛しける然るに妻は病氣となりて今いたのみ少くありけるをり枕邊にある夫に向ひ妾今は思ひ残すこと少しもあはれとも彼の小花の事のみ如何に思ひ反さんとするも叶はず願くは妾の死後に必ず彼を遠け玉へとて死けるか永田の其後も前にかはることなく小花を愛せしに或日櫻屋と云へる待合にて小花に別れ歸らんとてつと立て境のふすまを開きたるに人の氣はひするより何人そと見るにこは如何あ亡妻か悄然として坐り居しかは男も女も驚きて逃げ歸りしと其後の二人が會合するときは必そ其の姿現はれ果てゝ常に此の待合に晝夜の別ち無く現はるゝよ

り何人の目にもふれ障も高くありけるにそ永田の小花と待合のあ
るしを打ちつれ妻の墓に参りて堅く後來を誓ひて歸りしかその後
の再ひ現はるゝこともなくなりしと現に余か知人石浦某も之を見
たりとて物語れり

幽霊談の獨り日本のとならす外國にも多し「ドクトルヒツパート」の怪
物論を見し人の必す之を知るあらん

英國の汽船某号にて水夫の死せしことありまか數日を経て航海中
彼の水夫現はれ甲板の上を徘徊するを見しか其後の時々現はれ出
てしに由り他の水夫等も終に之に慣れ亦「バイロン」の出まゝとて驚か
すありしと「バイロン」の死せま水夫の名あり

非幽霊

世上に幽霊談として傳へらるゝ事柄にして之を仔細に吟味すれば全

く幽霊にあらざるものあり半假に名けて非幽霊又の類似の幽霊と云
ふ而してこの非幽霊は多く外國の狀況に由り又の幻想に由て起る世
の幽霊談の多くこの二つのものに由て構成せらるゝか如し外國狀
況といふ半夜墓所を通行し又の夜雨蕭々たるときに古戰場を過る等身
邊を圍繞する景物の寂寞荒涼に属するを云ふ幻想の精神作用の異常
に由て起るものにまて之を生すへき形体的の刺激なくまて物象を見
又音聲なきに其聲をきく等の如く諸種の精神作用特に外覺作用を起
すを云ふ五官器の異常に由て之を起すことあり又思想情緒の盛なる
とき其の影響に由て之を起すことあり時としてこの二つのもの相
合して幻想の原因とあることあるあり

五官器の變象の其の疾患に由て之を起すこといふもとよりありと雖も
又其の媒介物即ち空氣等の狀態如何に由て之を起すことあるものな

り例せし風の爲めに竹竿樹梢を掠むる聲をききて妖怪幽霊の來るか
と怪み光線の屈折に由て物体の真相を誤り之を幽霊かと驚くか如き
皆是れ媒介物の状態に由て起る所の幻想なり
精神病者が視覺聽覺等の幻想の盛あること人々の知悉する所なり
と雖も假令精神病者にありさるも往々幻想に由て幽霊を見ることあり
是れ心内に想像情緒の如き心性作用の浮動盛あるに起因するもの
なり五官器に常に外來の刺激に逢ふて始めて之を覺知するものあり
て外物の刺激なきときは決して五官器に何等の感覺を生ずること
なし故に外來の刺激先づ五官器を衝動刺激して而して後ち之を思想
の中樞に感ずるものとす五官器と思想の中樞との神經を以て連絡關
通するものにまて外來の刺激に由て知得せし所の景象にして五官器
に映することあり必そ其影を中樞に落すこと猶寫眞鏡の「レンズ」と壁硝

子の關係の如き
斯の如く五官器と中樞との密接の關係を有するか故に若し或事情に
由て中樞の興奮盛あるときは其興奮を五官器に反及し茲に一種の變
象を起すものなり常に外來の刺激と五官器との關係強固あるか故
に思想の爲めに五官器に影響を及ぼすか如きことなまど雖も若し或
る事情の爲めに想像情緒等の非常に作用を逞ふすることあるときは
前述の如き一種の變象を來す故に心中に死せる友人の事などを深く
思ふし或は其の幽魂の現はるゝことあるへしと思ひ或は又誰々を斬
殺せるの誠に非道慘酷ありしを以て其幽魂の來りて我を襲ふあらん
等の如き思想情緒心裏に往來すること頻りあるときは終に中樞の興
奮を五官器に傳へて茲に一種の變象を起して幻影を見るに至る五官
器中最も變象の多きは視覺聽覺にして殊に視覺に之を生起すること

多し故に或る心情の盛に浮動するに當てり往々幽霊を見ることあり之を説明すれば左の如し

甲

乙

外來の刺激

幻影

五官

五官

中樞

中樞

甲は是れ平常に於ける物象と五官器と中樞の關係に於て乙の之に反して中樞の興奮盛にして五官器に影響を及ぼして幻影を現出する時の關係あり

是れ幽霊の精神作用に由て起る所のものにして非幽霊の原因なり大概の之を以て幽霊とあすもの多し以上説述せる所を概括して云へば非幽霊の精神作用の變象に由て一

種の幻影を見るか或は又外圍の狀況と精神の變象と相合併して之を構成するものありと云ふへし

ドクトルチューク氏一日寫眞帖を取出し繰返して友人親族等の肖像をかめ居たりしに内に數日前死去したる友人の寫眞ありければ思はず其言行を追想し愛慕の情を起せしか起て他室に入らんとするるとき氏の前面に彼の友人の佇立せるを見一時大に驚きしも其の幻影あることを察し之を熟視するに幻影漸く消滅して終に窓掛のレースとなれり依て再ひ之を見んことを勉めたりしも能はざりしと云ふ

又

千八百六十七年の頃英國に於て火災の爲めに焚死せし一紳士の未亡人追吊の爲めに其墓地に至り心に怪むべし死せる夫の嚴然とし

て墓地に佇立し居たるにそ婦人の愛慕の情に堪えず握手せんとし
て近寄りしに其夫と見へしに全く幻影にして墓上に建てありし標
木ありしと

水鳥の羽音を聞て敵軍の襲來かと驚き尾花の風に靡くを見て幽鬼の
我を招くかと怪むの類皆これなり

靈憑 生靈死靈

彼の靈なる心力の活動か他人に感傳波及するの結果に受感者の心身
に一種の變象を起すことあるものにして此の場合に於ては受感者の
全く自己の精神を亡失せ施感者の思想を其の儘に感受するものにし
て恰も甲の思想か乙に憑據せるか如き看を呈するに至る故に施感者
の思爲することい受感者も亦之を思爲せ施感者の言へんと欲する所
のことい則ち受感者の口に因て話說せらる施感者右せんと欲せし受
感者即ち右し施感者左せんと欲せし受感者即ち左す歌はんも欲し笑
はんも欲し往んも欲し止らんも欲して甲乙悉く相從ふ此の奇怪なる
現象之を稱して靈憑と云ふ施感者の靈魂か受感者に憑附するの謂ひ
なり

此の思想感傳に由る現象は自然に發するものなりと雖も人工を

以ても亦之を行ふことを得其の自然に發るものゝ世俗の所謂死靈及
ひ生靈と稱するものにして人工に之を試むるを靈翹術と云ふこの術
ハメスメルズム等と同じく古昔キリシヤ人及びローマ人等が往々施
行せし所にして特に僧侶が天神の功驗を説く爲めに専ら用ひられし
と云ふ野蠻人の思想にハこの思想附翹即ち心力移行の現象を以て天
神靈物の作用を歸し頗る之を信仰恐懼えたるものゝ如し故に一舉物
を行はんとするときに其の判斷の決し難き際にハこの靈翹術を利用
し之に因て其の如何を決したるか如き又或ハ災害危難に逢遇したる
時の如き之を以て天神靈物の憤怒に歸し又靈翹術に由て天神靈物の
思慮を尋ねることあり例せばニバルの魔法師がサミエルの幽靈
を呼ひ其の訓告を得んとせし如き又ヨラバ民族が雨師を以て靈物を
勧誘するの力を委せられたる媒介者ありと云ひしか如き其他我國に

在ても「いちこ」神をろし」と稱するものゝ類皆思想の傳播に因て發起す
る現象を誤りたるものあり之を要するに野蠻人及び宗教上の妄信者
ハ他人に翹據する所の思想の傳播を以て一種の靈物又ハ天神ありと
誤信し其の天神及び靈物の普通人類の如く感覺知覺思考等の諸能力
を有するものありと誤信するに由る

死靈ハ憤怒怨恨等の如き思想の遺留せるもの即ち游離の心力が其の
目的の人に向て平均を求むる際に起る所の現象にして此の場合に於
てハ受感者の全く自己の神心を喪亡えてこの游離の心力即ち死者の
思想を以て腦中に満たさるゝあり其例古來少しとせず

靈翹術即ち特更に思想を受授感傳するの法ハ二種に區別せらるゝか
如き即ち受感者が特に己の精神作用の休止を謀る爲めに可成無爲無
我の方法を取て他の心力の感受附翹を容易ならしむるもの即ち「いち

この類と一は受感者をして其の思想を休止せしむるか爲めに諸種の方法を以て他物に心力を注集せしめ漸次其の無想の境に至りしを謀り施感者か其の機に乗して己れの思想を附翹せしむるもの是れなり即ち降神術の術者の如し故に甲の場合に在て受感者即ちいちこの何事に限らす其の依頼者の思爲する所を其儘に口に漏し乙の場合に在ては神主(即ち神の附翹する人)は無心に術者の思想又他の詰問者の思想を感受して其の思爲する所の如く語る然れども二者主客差異あるのみ

この思想感傳の作用も亦心靈動機の轉化に起因するものゝして即ち張力の變じて活力とあるに因て起ること前の各章に述べたる所に異ならず故に彼我甲乙の連貫一致を要すること^勿忽論あり前にも云へる如く心力の感受は受感者の精神作用休止したる際にのみ其の作用を

現するものあれば假令睡眠時の如く永く其の作用の休止せざるも少時にても其の休止せる時にあらされん決してこの心靈附翹の現象を見ること克はす然れども其の一たび感受したる後の容易に又離去することおし特に受感者か之を屢々行ひて習熟せるに至ては其の附翹も實に容易にして其の現象の奇なる一見之を信する克はざるか如きものあり而して其の自然な發する靈翹即ち死靈生靈たると又人爲に附翹せしむる所の彼の巫女、口寄、降神術等たるとを問はす心靈傳播の了りたる後に其の翹據中何等の事をおせしか又何等の事柄を話説せしかへ更に之を記憶することなし特に其の離去の後暫時の間は恍惚として容易に心神整復せざるものあり

名古屋巾下町に桶屋某あるものあり家世々日蓮宗の信徒にして某も亦頗る熱心なる信者なりしか先年其妻か眼病を患ひたりしによ

り某の切りに信心をよめて其の平癒を祈禱せよ其の甲斐なく終に妻の失明せり某大に怒て余が家の代々本宗の信者あるも祖師大士の惠護なくして妻が失明するか如きは是れ祖師の佛力靈驗なきによれり今よりの斷して本宗を脱すべしとて家に安置せる日蓮上人の畫像を破らんとせしに傍らにありし妻忽然として一種の異相を形成し奇異なる語調を以て余の祖師日蓮なりと絶叫し徐ろに口を開きて曰ふ汝然か思ふの大なる誤りあり先づ心を静かにして余がかたる所をきけとて端坐して威儀を繕ひければ某大に驚懼し敬恭の念忽ち舊に復ちて妻なる日蓮の前に平伏せしに妻の語を續けて曰く汝の妻の失明せるは汝が平素の信心によるあり夫れ女子の物に執着深く從て迷ひ易し執着多く迷ひ深き罪深き道理あるか故にこの罪を去らんか爲に失明せしめしかり夫れ執着の五識によ

るもの多く特に眼識に因て執着を起さしむるもの多し故に之を斷て迷を捨て執着を去り從て種々の慾念を除くを以て善根之より大なるはなし美麗なる衣服を見善き飾物を見て煩惱の念を起すの女子の常あるか今よりのちのこの事なかるべしゆめ疑ひを抱くこと勿れ故に何事も限らず汝心に不審あるか又の安心せざる事柄あるとき一々余に尋ねし余の汝の妻に廻りて之を教示すべしと言ひ終りて妻の卒然前に倒れたり某信心膽に銘し之れより信力舊に倍し決せざることも又の不審ある毎に其妻をして端坐せしめて禮拜す然るとき己の思ふ所の神佛妻に廻りて之を教示せりと豈亦一の奇談あらすや

然れり近隣の人々之を聞き傳へて争て夫妻の教示を乞ふに一々己れの思ふ所の如く不審を判斷すると實に不思議なれり人々の崇敬

大方おらさりしか桶屋夫婦の余が舊里へも來りて諸人の乞ひに應じて吉凶を斷し不審を判せしに其事を傳へし血氣の壯年數輩、文明の世にかゝる奇怪のあるへき道理なし往きて其の詐術を見顯さんとして其の旅宿に至りて桶屋夫妻に面會し頻りに之を論難せしか夫婦のもの云ふ我等の極めて愚かにして到底議論等をあすこと叶はず只祖師上人の教示に従て諸人の吉凶を判するに過ぎされの論より證據あり妻に向て直接に教示を受けその不審を質せよと云ひしかは壯年等大に喜びていさ問答せんといふめ寄せければ某曰く祖師と問答せらるゝ最とやすき事おからたといふ足下等之をなすも祖師の音聲容貌を知らざるか故に恐くいつくり言なりとて信せざるへし寧ろ足下等の知人を呼び出して面會問答せらるゝころよければ是れ却て其の疑惑を解くに便ならん知人に物故せし者の無き

やと問ひければそは此方より望む所あり然らぬ余が兄先年死去せるものあり之に面會したしと求めけるに桶屋の更に其兄の名の何と云ひしやと問ふ壯年其の法名を以て答へたるに某云ふ様夫の僧侶が死後に命したる者おれに之を云ふも足下の兄の自分の名あるを知らざるへき俗名の何と云ひしやとの問ひに先づ其正理なるに稍々壯年の心を曳きたる者あらん是に於て答ふるに俗名を以てしけるに某の領して其妻に向ひ暫時祈念を凝したる後ち突然壯年の兄の俗名を高く呼ひしに不思議なる哉妻の面貌頓に異相を呈し眼を開きて壯年に向ひあを珍らしや弟よ汝に久しく面會せさりやか身体は健康なるや汝の幼年なりし故に記憶せざるへし余が先年井中は溺死せし際非常に苦痛を感じて終に幽界の人となり後種種の難業苦痛を経て終に今日にこの幽界中にて稍々安樂なる身と

なれど云ふ其の答辭頗る奇なり則ち奇なりと雖も音聲語調實に阿兄の生前に異あらざるのみあらに精神上の作用ふや其の容貌さへ幼な顔に見覺えある兄に似りしとあり且つ其の兄ある者の誠に桶屋の妻か云へる如く往年井中に溺れて死亡せしに相違なければ壯年等も餘りの不思議に恍惚として夢とし如く尙種々の事柄を尋ねるに一々心に覺ゆることのみありと而してその妻の答ふる所は壯年の心中に斯くあるへし又は斯る事柄あらんとの想像に一々符合せりと

地藏廻

磐城國白川附近の地方にて地藏付と稱すること行はるこの某所の地藏か何人かに附廻して種々の事を預言し又の信者(寧ろ遊戯者)の望みに應じて種々の舞踏をなし或の流行歌を謠ふものあり其事頗

る卑俗なりと雖も亦心力感通の作用に因て克く人を左右することを得るを證すへきを以て左に之を記す
地藏付といふ農業の間に村内の人々打集まりて一團となり先づ始めに一人の地藏の付廻すべき人を撰ひ之を中央に圍みて團坐し其の人の手巾を以て眼を閉ち斯て準備全く整ひたるとき其の周圍の人々一齊に床を打つて地藏地藏地藏取り付くといふ連叫するなり斯の如きこと暫時なるとき其の中央に目隠しせる一人の無我無心とあり謳歌につれて身体を運動し始むるに至るへし之れ地藏の付廻したる徴なるを以て一齊に叫呼することとを休め周圍の人進みて何れの地藏來せしと問ふへし然るとき其の彼人の我の某地の地藏なりと答ふるを以て人々の種々の疑問を發して地藏に教示を乞ふなり其他地藏尊の何を好むるかや大津繪節なりかつばれなり御聞せあ

るへしと云へん地蔵の聲高らかに之を謳歌す又然らば何ありとも
 一曲御踊り下さるへしと云へん地蔵立て舞ふ周囲の人一整に謳歌
 して之れに和そ之を地蔵付と云ふ盛に行はるゝ習俗ありと而して
 全く種々の游戲終れば地蔵御歸りあるへしと云へん地蔵突然とし
 て前に倒る是れ即ち地蔵か歸り去りて徴あるにより彼の目隠せし
 人の顔に水を吹きかけ又其脊を打つ等をなせば暫時にまて精神
 整復せし然れども此の演したる種々の事柄の凡て之を記憶せざる
 とおし又其の演することの曾て其の人知らざることをも之を行ふ
 と而して其の演出とること又の預言等の凡て尋問する人の思爲せ
 ることを語り思爲せるか如きを演ずると云ふ
 この事の各地方に行はるゝものにまて府下近傍の某村等にも之を行
 ふことありと聞く蓋し心力感傳に外ならざるあり

予か知人某氏の本術の研究に熱心にして種々の試験をも成して頗
 る其の應用の妙を得たり曾て一童子に向て已れと對坐せしめしに
 少しも方法を用ゐずして童子の某氏の心力を感受し稍々恍惚たる
 の狀を呈せしに某氏の傍らより小石を取り童子は此五錢の白
 銅貨と汝の持てる一錢の銅貨と交換せすやと云ひまに童子は稍や
 暫く之を見較へたるのち交換すへまを已れの持てる銅貨を某氏に
 渡し小石を白銅貨と信して之を受け丁寧に之を懷中に收めたり氏
 又一枚の白紙を持ち來り童子は汝の當年二年三ヶ月なり之に何な
 りと記載せよと云ひしに童子は書くこと克はすと云ひまは氏は
 然らば汝の當年十五歳なり月落烏啼と書けよと云ひしに彼は美事
 に之を認めたり氏又更に一葉を取り出し汝の當年七歳なり之に月
 落烏啼と書けよと云ひしに童子筆とりて之を書せり然れども之を

前のものに比すれば遙かに劣りて全く頑是なき小兒の書せるもの
と如くなりし茲に於て氏の童子に向ひ拍手せよに童子の始めて我
に回りしも先に銅貨と白銅貨と交換せしこと少き之を記憶せ
さりし
又某氏の(山形縣人あり)種々に本術を研究し大に其の妙を極めたり
しか單に心力作用のみによりて人を制せんことを試験せよに未だ
好結果を得ずと雖も犬及び小兒等(生れて百五十日を経過せしも
の)略し心力作用により隨意に行動せしめ得るに至りしと
又某氏の試験せし所によれ魔術の始め施術せよ人の外に何人
も被術者をえて自由に行動せしむること克す故に施術者以外の
人にえて被術者をして自由に行動せしめんとする時の施術者の承
諾を得ざるへからす即ち施術者が心力を其人に移轉せしめたる後

に知らされし局外者の意思に因りて被術者を制する事能はざるも
りとは是れ實に然るべき道理にして一言に之を説明すれし被術者の
心身の施術者の心に連繫せること其間に電線を張れるか如し故に
若し施術者以外の人にして被術者を行動せしめんとするもの先づ
其の電線を局外者に轉繫せしめざるへからざるか如し故に一たび
施術者の心許を得れば之を運動せしめ得ること少しも施術者と異
なるとなし

夢及奇夢

單に夢といへん睡眠中に生起する所の一種の精神作用にして平生深く思爲すること又の醒時思爲し及び見聞せし事柄の睡眠時に方り不規則に斷續して頻々腦裏に往來するものにして忽にして起り忽に去て滅去其狀の千態万様にして變化窮りなきこと實に想像も及ばざるものあり之を要するに夢の斯の如く斷續不整なるの全く心性の注意力を欠くか或の僅かに注意力の存在するに由るものからん茲を以て醒時に於ての一の事柄を想像するも必ず初めより終りに至るまで順序整然と去て前後不揃なるか如きことなしと雖も夢に在ての其の思考する所想像する所多くの首尾不整にして次第あることなし是れ即ち前に云へる注意作用の欠亡せる爲めに心性作用の思想の聯合せるまゝに種々雜多の事柄に想到し其の想像を以て直ちに事實とあすに

よるものあり故に忽ちにして春園に咲き乱れたる花を見ると思へん又忽ちに天空に飛揚することあり或の海洋に航し或の未だ知らざるの國に到る何ぞ其の現象の奇あして且つ怪ある是れ他なし想像を以て事實と誤り其の想像の又前後不整極めて錯雜せるものあり之を例ふるに彼の小兒の遊技に行ふ字繼と稱するものに異ることなし字繼といはれ始めの一人先一字を書するときは他の兒童の其の文字の偏又のつくりの依て種々の文字を書するものあり即ち一人先つ林字を書すれば次に林字の木に公を配して松字を造るか如く順次變轉して種々の文字を書するを云ふ夢の現象の殆んど之に異ることなし夢の斯の如く不規則にして繼續不定あるものありと雖も時として終始順序正しきことありこの固より希有に属するものあり何人の夢も多くは不整不規則あるものに去て雲を掴むか如きを常とす人の其

の性質に由て平素一事物を思考するにも思想の動作整然として其の順序の乱れざるものあり又思想散漫錯雜して忽ち或る事物に就て思考するかと見れば又忽ち思想の他に移りて更に起結の整へざるありされは睡眠時の想像即ち夢に在ても多少人々の性質に由て順序正しきも有り又否らざるもあるへし

夢の實に不規則ある想像の如し然れどもその想像なることを忘れて之を事實なりと誤認せるものあり恰も彼の鏡面に對へる人か其の影像の自己の反射物たることを忘れて鏡後に人ありとあすみ異らす夢の前述せる如く睡眠中に起る思想の作用あり故に全く腦髓作用の休止して眞に熟睡せる時に決して夢を結ふことあしされり夢の腦髓作用の半の休止したる所謂半睡半醒の境に之を結ふものにしてこの不完全ある心性作用の平素心内に潜伏せる思想の浮動するによる

ものありといへども其の浮動の時として外來の刺激に促されて之を發することあり例之の睡眠に當て耳邊一羽の游蜂飛揚するもせんか其の羽音の忽ち聽神經を刺激して人をして半睡の境に誘ひ來り半睡半醒恍惚の思想の人をして終に之を一種の音楽と誤るに至り曾て音樂をききて事を想起し夫れより種々の思想聯合して茲に始で一種の夢を結ふ其他枕邊を人の歩行するときに地震を夢み枕を外して溪壑より墜落するを夢む等皆外來の刺激に誘起して起るものあり彼の梅園に散歩せる夢の端なくも鶯聲に破られたる如き實の初め鶯聲を聽きて睡中の思想か梅園を想到せるによるものあり

中村勝之助と云へる學生曾て熟睡せるとき其の友人が手燭を持て室内に入り來りしに中村が頻りに煩悶の狀を見て之を呼び起せしに驚き醒て出火して室内火焰に閉ぢられしを以て如何に逃出んと

するも出ることも克ひざりし所を呼び起されしと云ひしことありこれ獨り睡眠中にのみ事實と誤想するのみにあらざりて現にニカラギョウ民族及びヒツエツター民族中に往々醒覺せる後に於ても尙夢中のことを事實なりと誤信し靈魂か或他の世界に出遊せりと信するものあり今日の社會にハ斯の如きことを信するものあじと雖も尙或る宗教上に行はるゝ鎮魂術と稱するもの頗る之に類するものあり即ち人を或る方法に由て恍惚半睡の境に誘き其の精心作用の全く不充分なる際に種々の咒文祝詞等の如きものを讀み聽せ然るのち其の顔面に水を注ぎ又ハ大聲を以てその耳邊に姓名を呼ぶ等漸次精神の回復を謀り而してその全く醒覺して精神平常に復したるときその方式中如何ありしやを問ふときハ尊き神か咒文祝詞を讀み聞せ且つ遠く微かに己れの姓名を呼へり誠に尊き事なり等の事を以て答ふと云

ふか如き皆睡中に想到せることを醒覺後も尙事實なりと信するものなり睡眠中に想到せる事柄を事實となせることに於て更ハ奇あるものとあり是れ全く之を信するの深く且つ甚しきに由るものにして睡眠中に突然として起立歩行し或ハ種々の談話をなす等は是れなり夜行又ハ夢行と云ふ是れ亦睡眠中に起る想動作用に外ならず

千七百五十年頃の事ありしとか英國の海軍士官某と云へるもの其の睡眠中他の艦船が入港して祝砲を放ちし聲をきき突然起立して甲板上へ出て号令を發ちて兵士を指揮するの狀をなすより一船大に驚き是れ必ず發狂ならんとして種々介抱せしも士官ハ中々に之をきき入れず種々戰備をなすもの如くなりしか誤て跪き倒れ始めてその夢を醒またりと

紳士某君一日從者を伴ひ蓮光寺の近傍に獵せまか終日一の獲物を
さより從者と共に路傍の木に腰掛け休息せまか從者の終日の
疲勞にや頻りに睡境に入るか如し紳士戯に其耳に口寄せて狐來れ
り〜とささやきまに從者の忽ち起立して馳せ出さんとせしとき
傍にありし獵犬の一聲高く吼るに驚きて夢を破れりと
斯の如き夢の外亦尙一種の夢あり之を奇夢と云ふ是れ其の夢みし事
柄か未來の事實の前兆とあり或又或る他の事實と符合せるものに
して世俗に云ふ靈夢又ハ夢感の類即ち是れありこの奇夢ハ實ハ夢と
稱せべきものにあらす也雖とも其の現象の相類似せるより常に之を
夢と云ふ

奇夢即ち靈夢なるものハ前に云へる如く或る事實の豫言とあり又前
兆となるものにまて例せハ友人の來るを夢みて其の翌日友人の訪問

に逢へるか如き又立身出世すると夢みて顯要の職に上るか如き凡て
夢中の事柄ハ醒覺後の豫言前兆とあるものにまて尋常の夢の前後不
揃に且つ散漫錯雜せるものと全く相反したるものなり又時としてハ
同一の夢を再三再四夢みることあり

奇夢と尋常の夢との其の性質固より同しからず奇夢ハ睡眠無我の時
に當て或る事實を感得收受し其の感得に由て心内に浮へる現象を事
實ありとするこの尋常の夢と異なることなしと雖も奇夢に在てハ其
の原因外より來り尋常の夢に在てハその原因多くの心内に存す假令
時として外來の刺激即ち音聲感觸等によることありと雖も是れ實ハ
己れの思想を動かす所の誘因たるに過ぎずまて眞の原因ハ自己の腦
髓にあるあり奇夢中に感得せるハ己に總論の條に於て述べたる如く
心力波動の作用によるものにまて即ち甲の心力を乙の腦中に波及感

傳えて現はるゝ所の者を事實なりと認むるによる感通の一方の精神作用休止せる時に當て一方の心力侵襲竄入するものにして其狀恰も電氣の兩極相吸引するか如きものあり而して此際に受感者の精神作用全く休止せざるへからず是れ奇夢靈夢の熟睡中に多き所以なり然れども心力波動の感傳に假令少許たりとも乗すへきの機あらひ忽ち之に侵襲すること猶空氣の眞空を侵すか如きを以て或は全く熟睡せざる時あつても心氣恍惚たる際の如き時として他の心力に感ずることあり世人が多く談柄とする夢幻の間ひ誰某に邂逅せりと云ふか如きに恐るゝ斯の如き心力感受によるものならん之に由て之を見れば奇夢と尋常の夢との道理の上より云ふもろの性質の上より見るも全く別種のものたること論を俟たず即ち一の注意力に乏しき不規則ある精神作用にして其の原因内に存せん外來せ

る心力波動の刺戟衝動に由て之を感ず故に其の原因外に在るなり今左に此の二のもの異なる點を列舉すれば

夢は 睡醒の境に於て之を見る

奇夢は 熟睡無念の際に之を感ず

夢は 順序不整あり

奇夢は 順序整然たり

夢は 原因内にあり

奇夢は 原因外にあり

夢は 醒後の事實に關係なし

奇夢は 事實の前兆となり豫言となる

夢と奇夢と相違せること前の如き然るに其の現象の相類似せるを以て之を混同一視して區別することを知らず故に若し睡眠中心力の感

傳によりて奇夢に感ずることあるも偶然の符合なりとて之を安排するもの多し之に反して又世の妄信者の如き一たび奇夢に感ずることあればその奇夢の事實の前兆又の豫言とありとて夢の全く事實の前兆とあるものと固信して其奇夢と夢との區別あることを知らず之を要するに甲乙兩ながら睡眠中に起る所の相類似せる現象あるによりその原因の内にあると外にあると又その性質の同一なるや否に注意せずして單に之を夢と稱するに外ならず今之を區別すれば

奇夢

睡眠無我の際に他の心力波動に感して起る者

夢

睡眠時又の半睡眠時に
自己の心内に伏在せる
醒時の想像の思考を浮動
して又の五官の思考を誘起
る一種の思考を誘起せし
るに由るもの

共に睡眠中に發起する者
に於て其現象相類似せる
により混合誤認せるなり

之を譬ふれと一の鏡面に映せる自己の姿を以て誠の人とあすか如く一は己れの前に立てる眞の人を以て誠の人となすか如し一見それの同一なるか如く見ゆれども注意して之に對へ一は幻影にして一は誠の人間なることを知るあと決して難からざるへし
伯爵某一日机に翹て坐す靜に戸を排し來るものあり之を見るに令嬢の茶を侑んとて入り來るものあり風姿漸く衰へて花容亦平日のものに似す綺羅猶重きに堪へざるか如き伯爵怪みて謂らく彼が同胞皆夭折して存するもの僅かに嬢の一人然るに今其の狀貌の悄衰斯の如き恐くは亦同胞を地下に慕ふものにあらざるかと其の去るに及びて目送して涙下るとき誤て其持てる所の茶器を落す驚き醒れば從者の頻りに之を撓して電報の來れるを告るものなり嗚呼夢なりしかと披て之を見るに何る量らん令嬢の死を報するものなりし

とこは是れ伯爵か曾て漫遊して上海にありし時の客舎の奇夢なり
杉山某氏醫を以て業とす曾て其の従弟の病篤きに及ひ之を其の家
に診し更酣にして歸る半夜其の門を叩くものあり之を問ふに従弟
か死を告るの使者なり氏驚き覺れり方に是れ一場の夢ありし斯の
如きもの再三氏懐愴の情に堪へず終に夜を徹せ黎明頻りに門を叩
く開て之を尋ぬれば則ち従弟の死去を報するものにして其狀夢中
に見し所と少しも異なることあかりまど氏頗る奇話となし後之を其
の親戚某に語るに某も亦同夜同一の事ありしを以てせりと
友人高野氏余か奇夢を談するを以て告て曰く伊豆國君澤郡大仁村
に杉山と云へる舊家あり家傳に邸内某所に古金を埋めし所三ヶ所
あり若し家資凋零に際せり掘て以て産を助けよ然れども猥りに之
を人に語る勿れと且つ家の相續者にあらされはこの傳説を聞くこ

とを許さざりしと曾て其家財政の困難を來し頗る其の救済の道に
苦みしことありしか其家に使ふ所の小童一日主人に向て昨夜夢に
老人あり我に告て曰く邸内云々の所に古金の埋没せるあり掘て以
て家資を助くへし之を掘るとき三尺三間三丈等三ある數に注意
せよと云へりとて頻りに其の發掘を勸む然れども主人固より斯の
如き家傳説に信を措かず且つ小童の語る所誠に一場の奇談たるを
以て之を一笑に付せざるも頻りに小童の勧誘するより試に童の語る
所を發掘せしに三間にして終に一の古瓶を得之を檢するに豫言に
違ふすこの古瓶中に數多の古金銀を藏めありしとこの杉山氏の
高野氏の姻戚にして最も慥ある談話あり

斷食

斷食といふ動物の生活に必要な食料を全く謝絶して而かも能く其の生命を保続するを云ふ獨り生命を保続するのとあらず心身の健康少しも平日に異ならず時として更に健康活潑の状態を顯はす一種奇怪なる現象を云ふ

この奇怪なる現象の生理學者の百回千回考究するとも蓋し其理を求め得ざる所にして一種の學者の試験や論究の到底徒勞に属するものと何とあれば右にあるものを求むるに之を左に探ると一般其理法を異にとればなり故に之を探ることも愈々深けれは之に遠かること愈々甚し

生理學者の生命保続に必要な栄養品の必ず之を他より輸入せざるべからずと云ひ何人も之を當然の説なりと信する所なれども斷食論は

れい今日の生理學者の云ふか如き所謂滋養食物の生命保続に必要なとすといふを以て此の両間全くその説の根據を異にす是れ現今の生理説に由りての斷食の到底解説せられざる所以なり故に斷食の如き奇怪なる事柄を解せんと欲せし從來自己か信する(即ち書籍に由て習ひ得たる一種の理論)所を捨て平心以て之を探究するにあらずれい恐く其の眞面に接すること能はざるへし色眼鏡を掛けて物を見るとさへ眼にふるふもの悉く同一の色に映して其物本來の色澤を知ること能はざるか如く生理上の色眼鏡を掛けて宇宙萬物の眞相を窺ふ何と其の色性を誤るなきを得んや

動物の食物に由て其の生命を保続す種族を播殖するものあり即ち植物性官能に由て養液の製造循環及び滌潔の各作用を完くし因て以て身体の消耗を補給し體質の成育を助く故に補消に必要な一定の養

分を給せざるに終に全く體質を消削して斃るゝに至る是れ動物に向て其の營養に必要な養分を與へざるを得ざる所以なり有生物の獨り動物のみ然るに非ずして植物の如きも又其の生存に必要な水、炭酸、アンモニヤ等の如き養分の供給を要す故に有情非情に論なく其の生活に必要な食料を要するの動かしへからざるの理論なりといへ生理學者の専ら唱道する所なり

然れい吾人の生理學者の所謂食料(即ち營養食品にして身体營養に必要な養分を含有せる者)を用ふるにあらずれば生活し能はざるか一嚙の肉一片の麵包をも用ひずして生命を保續する斷食の如き希有の現象の暫く措き生理上に無滋養物となす所の或る種の菓物又ハ養分を含有すること少き菌類をのみ食して生存する種類のもの世に頗る多し單純の食物のみを以てハ生命を健全に保續し得すといへ生理

上の定論あり且つ又假令單純食品にあらずして二三の食料を混用するも山間田舎等の人種の用ふる所の食物の極めて淡泊無滋養あるものにして到底生理學上の營養食料の標準といへ比較すべきにあらず然れば斯の如く菓物を食し又ハ一二の粗惡品のみを食するものハ生理上より云へハ到底生活し能はざるべきものなるハ實際ハ全く之と反對の現象を呈し之を彼の滋養品を食するものに相比較するに却て其の健否相反するを見るのとならず心神の健全なる大に之に勝るものあり此の一事を以て考ふるも生理學上に云ふ所の食料ハ生命保續に果して必要なや否ハ知るへからず今生理學上必要にして攝取せざるへからずと云ふ所の滋養料を見るに一日の平均量ハ(但し歐洲人に就て檢せるものに據る)

水

六八〇〇〇

斷食

蛋白質	三四、五八〇
澱分及砂糖	一〇七、四六四
脂肪	二二、三四四
無機質	七、九八〇
合計量	八五二、三六八

以上記せる所の滋養分及び滋養の量を攝取せされ、人類生活に不適ありとの計算より米佛澳等の諸國に於て、左記の割合を以て兵士に食物を給せり即ち前記各國の兵士か一日の食量の

蛋白質	三五、一一一
澱粉及砂糖	一五五、六八八
脂肪	一一、六三七
無機質	五、九四八

合計量 二〇八、三八四

生理學上の理論によれ、人間の生活に、通常前記の滋養分を要するか如きと雖も斷食者の暫く措て論せず彼の僧侶か蕎麥又、菓實類のみの單食を、あして能く生命を保續し常人よりも却て健康ある、誠に生理學上の大疑問なり今蕎麥中に含む所の成分を見るに

蕎麥

水	一三、〇〇 ^々
蛋白質	一五、二〇
脂肪	三、四〇
炭酸水素抱合量	六三、六〇
纖維質	二一、一〇
灰分	二、三〇

斷食

合計量	栗
水	一三〇五
蛋白質	一三〇四
脂肪	三〇三
無窒素分	五七四二
纖維質	一〇、四一
灰分	三〇五
合計量	一〇〇、〇〇

以上記する所に由て之を見るに其中に含む所の物の實に僅少あるに其内より纖維質灰分等を減すれば滋養分の實に僅少となるべし況んや其内の滋養分の主なる蛋白質の如きは植物性蛋白質なるを以て極め

て消化し難きものなるに於てをや植物中に含有せる蛋白質の硬固ある纖維質を以て包圍せらるるを以て極めて消化し難きのみならず從て消化液の侵入を妨け却て不消化物となることありとホフマン氏に云へり植物食物中の蛋白質の其の不消化なるが爲めに殆んど其の半以上は不消化物となりて体外に排出するものあり故に植物食物のみを以て肉食滋養品中の蛋白質と相當する量を得んとするに其の倍量を食せざるべからず即ち百分の蛋白を得んに二百分を食せざるべからずと之に依て之を見れば斷食の其原因恐くは今日の生理學以外に存するあらん

斷食にハ有期斷食と無期斷食あり有期斷食ハ一定の時日を期ス其間少まも食物を給せざるを云ふ長さハ四五十日短きも一週日に下ることもなし無期斷食ハ終身食物を用ひざるものにして只時々少量の水を

飲用し又ハ霞を喰ふと稱して新鮮の大氣を呼吸するに過ぎざるあり
共に是れ宗教上の迷信又ハ仙術と稱する一種の宗教的迷信に因て行
ふものなりと雖も其の結果ハ實に今日の生理學上大なる疑問あり嗚
呼此生理學進歩の道途に横はれる大疑問ハ如何に之を解釋し得るか
此の疑問の説明し得ると否トハ今日の生理學上大なる影響を及ぼす
ものと云ふへし

人の身体ハ其の心思の勢力に因て自由に之を製することを得るもの
にしてこの力ハ獨り四肢の運動的作用のみに止らずして其の組織機
能より生活狀態をも改變するものなり即ち心力の如何に因て消耗營
養等の如き諸機能の變改を喚起するものにして是れ心力特殊の妙能
あり凡て心力が其の影響を身体に及ぼすことハ例之ハ怖ろしきもの
を見るときハ大暑の時候にも肌膚の粟立するを覺え耻辱を蒙るとき

ハ極寒の候にも猶流汗の背を濕すことあると異なり故に其の心思如
何に因てハ病体を健康体となす祈禱符祝の如き又之に反して健康体
を病体とあす咒咀の如き隨意に之をあた得るハ必竟心力が身体組織
機能の改變作用を喚起するものにして日蓮の奇行「キリス」の靈驗等
の如きも皆人体に種々の變象を起せしに由る
一碗の水も之を乳汁なりと信して飲用すれば能く其の口腹を肥え一
盃の温湯も之を酒なりと信して傾くれハ其人をして陶然として無上
の愉快を感せしめしかも顔面紅を潮えて歩行せられ酔歩蹣跚たり嗚
呼何ぞそれ奇怪なる然れども是れ眞に奇怪なるにあらざして彼の魔
術の試験又ハ催眠術を施したる際に屢々見る所にまで全く心力の身
体を制するの作用に外ならざるなり人の心内に深思する所ハ外貌に
形はれ又深く豫期することハ身部の機能に影響を及ぼすことあるも

のあり是れ實に心身の相關する所にして必竟信力の作用に由て然るに外ならず。信力の妙機實に斯の如きされは人若し食物を用ひざるも能く生活し得るものなりとの事を充分に信するか或は又彼の生理上の所謂滋養物あるものを用ひざるも空氣又水のみを以て能く生存に堪ふるものあることを深く心内に信するとき其の結果は必ず心身に一種の變化を起して彼の水を以て牛乳と同じく口腹を肥し温湯を傾けて酔を取ると同じく能く生命を保續して久きに涉ることを得へけん加之らず彼の斷食者を見るに朝起東方に向て新鮮の大氣を呼吸するか如きは亦大に肺臓の機能を助けて酸素富有の大氣を血中へ輸するを以て従て神経の機能を亢進するの効あるに於てをやこの方法を持續して休まされは肺臓の機能非常に増進して終に呼吸の機能のみを以て

克く生存し得るに至らん然れども信力の作用は實に斷食生活に必要なものにして此の一事は全く斷食ある奇異なる現象を喚起するの主動力ありと知るへき故に此他の宗教上に傳はれる咒文又は仙家に傳はれる秘術等は大槪何の用をも爲すものにあらすじて唯單に其の信力を強固からしむる爲めに行ふ一手段たるに過ぎざるべき。斷食は實に信力の作用に由るものなれば信力の固結強銳を要すること勿論なりと云へども之と共に食慾を絶ちて飲食嗜好の念を放棄する方法を求めざるべからず行者又は術者と稱する輩は斷食するを見るに山林に籠居して一切の人事を謝斷し専心讀經修練の外少しも餘念なく他に心思の移動するを防ぎて食慾及び他の五慾を忘るゝことを勉むるに注意するは實に斷食を習熟練磨するの初步に属するものなりと雖も其理は讀書習字に熱心なる者か食事を忘れ圓碁に熱中

するの徒か日の暮るゝを知らさるゝと一般心思を一方に注集して他に移行するを防ぐに由る

此一種の生活の實驗ハ古來宗教信者等の屢々實行せしものにして其の目的ハ宗教上の迷信よりこの術を行へば通力を得て飛行自在に天空に翔遊する無限の快樂を得ると信じて之を行ふか或ハ又この斷食を以て天神靈物に對し誓約の證と爲す爲めに行ふものなり然れども多くハ是れ宗教上の一儀式として行ひたるものにしてこの風習ハ葬式に關する風習より發達したるものあらんとスペンサー氏ハ云へり然れどもかゝる風習ハ恐クハ其の原因一二に止まるにハあらざるへしスペンサー氏ハ野蠻人の食を得る克はすして饑餓し爲めに明活ある夢を起すことありて隨て夢を起して靈魂に會遇せんか爲めに故ちに食を斷つに至るへし現時四方の野蠻人が斷食を行ふ目的

ハ一に茲に在り又云ふ死人に食物を供し尽したるか爲めに斷食を行ハざるを得ざるに至ることありて隨て斷食を以て死人に恭敬を表するの證と爲し終に宗教上の一儀式と爲すに至れるなりと然れども是等の説ハ恐クハ謬見たるを免れざるへまポルトン氏の説く所に由ればダホミーに在てハ死人の近親ハ斷食せざるを得ざるの風習ありと氏ハ之に向て説をかゑて曰く是れ始め葬式に多くの貨財を消費し止むを得ざるに出たる者の終に發達して宗教上の一儀式とありしものなりと此説も亦スペンサー氏の説と同じく一の謬見と云ふの外なしユカタン民族及ヒブリュー人等の内にも死人の爲に斷食を行ふの風習あるを以て考れハ其の原因ハ兎も角も歐洲諸國に行はるゝ斷食の内ハ我國の精進と同一の目的に由て死人に供養せる宗教上の一儀式たるものあるへし

我國に在ても佛堂に參籠せるの徒か行ふ所の斷食の内には克己自制赤心を靈体と誓ふか如き状態のものなれども仙術と稱する一派の斷食のみに之と目的を異にせるなり

斷食の此の如く其の目的一ならずして或は宗教上の儀式習慣に由るものあり又自己の心力練習の目的に由るものもあれども共に有期又は無期に營養食料を斷絶するものにして其の理論の前に述べたるか如し説く所大に今日の學理に反したると雖も暫く記して確説の出るをまつ左に記する所の帝國大學に於て行ひし有期斷食の最近實驗記にして其の理論の如きは今尙諸家の研究中に属すと云ふ

十四日間斷食の試験

病氣により或は病人の志望により數日若くは數十日間斷食するも飢餓に至らず身體にも亦異常の徴候を生ぜざることあり右の病氣

の關係によりて然るや否やの醫學上の一問題にして此問題を研究するにハ勢ひ健康體の人に就て斷食の試験を行ひ大小便の分析を始め呼吸體溫脈度重量を検査其生理上に及ぼす關係如何を究めたるの結果と前記病人の結果とを比較して然る後始めて判斷を下すの外あかるへし斷食の試験ハ先年獨逸伯林に於て一度ハ十一日間一度ハ六日間又佛國に於て三十日間之を行ひたるの外醫學上の研究としてハ是迄餘り聞かざる處あり本邦にても宗教信者の時に或ハ斷食するものあれども其人に就て別段醫學上の研究を遂げたることあかりしに近頃大澤醫科大學長の此研究を思ひ立ち成田不動おとに祈禱する斷食者を檢せしことありしも是とて充分の研究を爲し得ざる内今回始めて其志望の一端を達するを得たり

伊豆國韭山に鈴木範衛氏と呼へる人あり年頃三十六其性行頗る磊

落にして夙に佛教を信し時々鎌倉建長寺に遊び住職を師として禪學を學ひ或の座禪の業を遂げ或の數日間の斷食を行ふことあるのみならず平素人に語りて斷食の困難の事にあらす予の却て夫が爲め精神の愉快を覺ゆる旨語れり此事同地衛生會の議に上り遂に醫科大學長大澤氏に照會するに至りたり依て大澤氏及び隈川教授の生徒中の篤志者と共に此研究を遂んとし早速鈴木氏の上京を促し先づ其體格を檢査せしに偶と密尿病の氣味あるより折角の計畫水泡に属せんとしたるか同氏も之を氣の毒に思ひ己に代らしむるに實弟安井次郎氏を以てしたり安井氏も亦兄の舉動に倣ひ時々食又の減食を行ひたることあり先年師範學校を卒業し今や同地學校に教員の職を奉せり氏の年三十三常人に立超へて其身體健康と云ふ程にあらねどさりとて又孱弱の質にあらす實兄に代りて其任に

當るを盟ひたるにより大澤隈川の両氏も大に喜び本試験に先ち七月二十二日より同二十八日迄一週間半飢餓の試験を行ひたり即ち先づ二十二日同氏の體量を檢したるに十二貫百匁なりし爾後一週間一日の食料として毎日蕎麥粉百グラム凡そ廿六匁六分餘宛を與へたるのみちり迄か最終日に至るも身體に異常なく元氣亦活潑にして體量の僅かに四百目を減ち十一貫七百目となりたる迄なり依て愈々斷食の本試験に取掛らんとし舊の身體に復せしめんか爲め多量の食物を勧めたるも氏の剛情の性として容易に之を聽かず今日まで折角半飢餓に堪へ尙ほ引續き斷食の試験に應せんとするに際し多量の食物を食へば是迄養ひ來りたる身體を害するの恐れありとて如何に説き諭すも應せざるより遂に實兄の力を假りて漸く平常の食事に復せざることを承諾せしめたり依て翌二十九日より

八月六日迄の上等の脂を給し成るべく多量に食することゝ勧めたり而して同七日午前六時より愈々断食の本試験に取掛るに付き先づ體量を檢せしに十二貫四百目ありしか翌日の四時迄に三百四十目を減し次の百九十目、百三十目、九十目、六十目と漸次減量して十四日目即ち試験の最終期日たる去る二十一日午前六時に十貫七百九十目となり最初より都合一貫六百十匁を減せたり尤も減し方の漸次少量に赴かすして前日六十目を減し翌日二百十匁を減せたるか如き事實もありたれ共右の其前日比較的に多量の水を飲みたるの結果ならんと云へり又脈度の最初六十八度より八十度の間を昇降し十四日目より五十度とあり體温の始めの三十七度にて終の三十六度を示し焦衰の量の三百立法センチメートルありしと云ふ次に試験中の経過を述べんに同氏の毎朝早く起きて自ら井戸端に

出て釣瓶を以て冷水を酌み手拭を濕して身體を拭ふことを例とせり夫れより體操を爲し六時より十時頃迄の書見に餘念なく其後の手紙を認め或は看護人と碁を圍むなど少しも疲勞の體なく無異に十四日を経過せり夜の大抵三十分許睡眠するのみにて期日中に夢しことハ僅に一度ありしと云へり特に驚くべきは去る十八日(十二日目)退屈の餘り看護人と共に本郷春木座に到り芝居を見物し脇見もせずして熱心に俳優の巧拙を話し尙二十日の夜の寄席に赴きて落語を聴き大に喜び合へりとも又其途中も歩行頗る正確にして却て看護人に先つことありたりと云ふ斯の如き有様あれば精神に異常あかりしの勿論同氏の自ら元氣平日に倍せる旨を話し居たれども身體の漸次瘦せ衰へ四日目より顔に皺を現はし遂に目凹み頬落ちたり之に反して力量の更に變りなく却て平日より増したる

ものゝ如し

試験中の晝夜詰切りの看護人(醫學生)を附し注意怠りなく水と氷の外は一切飲食を禁じたるか一日目の水量七百八十立法センチメートル(凡そ四合三夕)を飲み四日目に至り氷五百グラムと水五百三十立法センチメートルを用ひたり左れに芝居寄席などに赴く時の看護人の豫め量り置きたる飲用水を携帶したるよしあり

更に進んで大小便の關係を聞くに試験前多量の大便を通したるも以後一回たも大便を催したることをなく只尿の初日八百八十立法センチメートル二日目八百立法センチメートルを通し十四日目には二百四十立法センチメートルとされり其尿の分拆の今回の試験に最も大切なる關係を有するものに於て之に依て始めて體內肉質血液の分解其他の影響を知るを得るものなり尿を容るゝ器の注意に

注意を加へて之を清潔に爲し尿を入れたる後の堅く其口を塞ぎて外氣に觸るゝことを避け且つ腐敗を防んか爲めに流水中に冷し置き一日丈の分量を合して之を分拆する事となし目下隈川氏の専ら其分拆に従事せり

断食後の體量と食慾の如何と云ふに去る二十一日の午前六時に至り十四日の断食を経過したるか別に著しき疲勞を見ず尙ほ此後少く共一週間の断食の繼續を得らるゝの見込あるを以て醫師の氏に向て種々繼續断食の事を勧告せたるも同氏の最初の約束の二週間にして余の精神も亦之を許したる以上の今更延期するを得ずとて之を拒みたり依て二十一日の朝より食物を與ふとぞありたるか氏の自ら平生嗜好する處の蕎麥粉及蕎麥を食せんと云ひ出て醫師も亦其意を容れたるにより當日の蕎麥がきと「もり」一ツを食ひ翌日

ハ蒸籠蕎麥二ツ其他氷砂糖湯等を飲食したるよし尙其當時ハ醬油の加味しある汁を嗜み非常に喜んで食したりと云ふ而して體量の去る二十二日の午前六時即ち食事を始めし後一日間にて三百目を増し昨二十三日の更に五百目を加へ都合八百目を増加し身體も退々舊に復し昨日の如きの平日と變りなかりしよし又同氏の語る處によれハ食事を始めたる後ハ毎夜睡眠し得らるゝも夢とること多しと云へり

前記の實驗ハ余ハ所謂心力作用に由て起リ之所の現象ありしや果して他ハ其の原因ありしやハ知らずと雖も余ハ信する所の心力の作用によりても必ず之を成し得るを信するなり(前記事ハ二十六年八月二十四日掲載時事新報に出づ)

幻術の應用

今若し幻術を習熟練磨し其理法を應用して諸般講演々説の説明等を補助することをおすこと恰も幻燈を以て説明を補くるか如くせしその利益ハ蓋し幻燈を用ひるの比にあらざるならん特に幻術ハもと心力活動の一現象あるを以て別に他の機械を要することなく極めて簡易に言語を以て説明し能ハる所の事柄を知らしめ然かも深くその感情に銘することを得へざらん然れどもこれ幻燈などの如く機械の使用を以て何人にも爲し得らるゝものと異り極めて最初に於てハ爲し難き心力習用ある一難事を練熟せされハ此の目的を達し難し己にこの妙機を悟得せんか其の施行ハ自由自在にして彼の幻燈を使用するに甚しき徑庭あることなからん必竟の困難と云ふも只實に困難と云ふのみにして決て不能事と云ふにハあらざるなり術者と被

術者にまて苟も心靈の存せん限りは必ず爲し得らるゝものなりと斷言するも不可なかるべし

今この術を應用して特に効力の現著あるべき宗教家の説教に際しこの理法に由て聽者に因果應報の理を目撃せしめ或は佛薩の尊像を禮拜せしむるの一事ありこれ佛門最上の法旨より云へば極めて卑近にして兒戯に類するの誹を免れざるからんも要するに只幻術を以て幻燈に代用せしむるのみにしてその出現の幻像即ち佛薩の尊体なりなど云ふにあらず只これを用ひて聽者の心力を確め疑心を去るの一方法便に供せしめんとの意に過ぎず即ちこれ由て聽者なる信徒か渴仰信心の念を加ふるに蓋し他の畫像木像等を禮拜するの比にあらざることを余の深く信ぜる所なり天樂の音聞へ蓮華雨ふるの時恍惚の際に佛陀の尊体を拜せし誰か信心隨喜の感を起さざるものあら

んこれ余か幻術の應用に幻燈の應用に勝りて効益ありと云へる所以なり

宗教上のことゝ熱心を以て之を傳へ熱心を以て之を迎ふ即ち宗教上の説教にこの術の應用か他の演説々明の場合よりも特に便利なる位置に立てりと思爲する所にして現に府下品川の某寺に於て或る僧侶か幻術を以て極樂淨土の狀を目撃せしめて非常に信徒の信念を加へたるか如き其の一例なり

其他講義堂に於て教師か生徒に説明するにも通常一遍の畫圖等を以て容易にその本旨を説き難きことあるものなり若し斯の如き場合にこれを應用し心のまゝに其の有様を目撃せしむるか如きも亦實に有益ある事柄あるべし或は救恤慈善の事業の爲めに義金を募集する際の演説例せし震災に罹りて家屋潰倒し堤塘破壊して人畜壓死せる

の状を目のあたり現せしめは之を見るものゝ感情も單に筆舌繪畫の上には於て之を見るよりも更に惻愴の情を感ずること深きあらん若し夫れ征清の我將士が堅氷を踏み朔風を凌ぎて勇戦奮闘の状砲雷轟き劔電閃きて天地も震動せん有機を現せしめ獨り將士遠征の勞を感ずること深きのみならず内にあるものをえて忠勇の感念を盛んならしむるの益あるに決して疑ふべからず

夫れ人内に心思盛なれし時に感官の誤迷を起して終に種々の幻影を見又幻聲を聴くことあるものなりこれ必竟精神作用の一方に旺偏して内外の區別を忘失するに依りて起る幻影を以て眞正の事實と誤認するに外ならず假令に色眼鏡を掛けたるものか林園草木の染色せるに驚くか如き林園草木の赤き林園草木の赤きにあらずして見る人の己の眼鏡の赤きによる幻影を見るものなり其心己に先づ一種の影

に化し去りたるなり

斯の如く自己の心裏に一種の思想盛なるか爲めに種々の幻像を見ること世間にはこの類の事實を見る彼の精神病に罹りたるものか幻影を見幻聲を聴くか如き或は又或る場合に於て想像盛なるか爲に幻影を見るの類の如し然れども今之を應用して人をえて故らに像を目撃せしめんとせし先づ其人をして方法に因て一種の想像を逞おせしめ而して外より之を誘ふことを勉めざるべからず恰も催眠術の施行に於て種々の暗示問を試るか如くするを要するなり例之に天上に音樂の聲が聴ゆるあらんと云ひ彼の所に如來の尊体の顯はれ給ひしあらん能く目を覺開きて之を見よと云ふの類是れなり然して又或る場合に於て斯の如き試問を用ひすして只術者が己の心裏に或る事物を想像組織するのみを以て充分に被術者に感ずるものとあ

るへしこれ實に心力感傳作用に因て起る一種の奇現象にして尤も機微ある心力感通の作用なり。

等しくこれ幻想あり然れども一に其の想の起る原因内に存し一に其原因外に存す即ち甲の種々の原因例への恐怖愛戀憎惡等の如き心情の爲めに己れ自ら之を作為し乙の然る所以の道理を應用して外よりその幻想を起さしむるにあるなり而して其の幻想を起さしむるに就ての種々ある妙機は數多度練習して以て其の淵奥を知得するの他之を求るの道なきなり。

羽なく玄て天空に翔り舟なくして海洋を走るもの、魔術の妙處に玄て聲にあきに音を聞き物なきに其の形を見せしむるもの、即ち幻術の本領なり然れども此二つのものに混交綜錯して其何れに屬するやを分ち難きことあり必竟魔術と云ひ幻術と云ふも固と皆心力靈機

の應用に外をあらすして只其現象の程度と作用の趣に因て假に名けたる區別の記号に過ぎされ、之を一括して心力奇現象と名くるも亦可あるへし。

結論

上來記述せる所の千妖萬怪ハ凡て是れ靈活ある心氣感傳の作用に属す心氣の感應ハ固とより機微隱約あり故に其の機の觸るゝ所光明を放つへく靈焰を發すへし嗚呼心氣流行の妙機ハ到底普通一遍の理法を以てハ解すへからざるか

著者ハ世の妖怪を舉げて悉く之を心氣の作用に期せんとする者にあらずと雖ども世の妖怪と稱する者の中にハ實に心氣感應の作用に因て起る者少しとせず即ち此書中に記せる所の類凡て皆心氣感應の奇象に外ならず是れ固と心氣感通上自然の道理に依て然る者にして別に奇怪不思議と稱すへきにあらずと雖ども只幻想の希有に属するか故に見て以て妖怪とあすに過ぎざるあり假令如何なる微物の生滅も豈故なくして起る者ならんや必竟其道理なきか如き感ある者の未だ

其の道理を發見し得ざるに依る學者と云へる世の迷想者か其師家遺傳ある狹少偏僻の識見を以て強て宇宙の大觀を論破せんとするより種々の道理以外の事實の出現し來るあり何ぞ知ん彼等か信して道理となす所の者の終に是れ道理の一小部分に過ぎざる者なることを畏懼の念をもてる者か白衣の懸りたるを以ても幽鬼の來り襲ふかど疑ふと同一く偏僻ある理法に附翬せられたる學者等ハ一種の迷想を以て宇宙を觀するか故に事々物々悉く皆妖怪不可思議の鬼相を呈し來るなり之を稱して心盲と云ひ又色眼鏡的學者と云ふなりタウ井ンの説に心醉せる者の「タウ井ン」の所説の外世上に道理あることを知らず「キリスト」を信する者の「キリスト」の説さし道理以外に眞理あることを知らざるなり世に此種の人多し孔子に附翬せられたる人釋迦に附翬せられたる人枚舉すれハ遑あかるへし各其の信する所に依て他を

排せんと勉めつゝあるなり恰も狐狸に魅せられたる者か山野に彷徨して金殿玉樓に遊ひたると思爲せるに異ならず讀者若し眞の宇宙の大觀を察し造化の真相を接せんと欲せば方に須く古來の學者等が主張せる偏僻なる色眼鏡的理法を脱却去りて虚心以て自然の妙趣を觀せざるへからず斯の如くにして後始て造化の妙趣に參する者と云ふべきあり是れ豈著者が奇言を放て讀者を驚さんとするか爲めあらんや讀者よ試に過去を追想せよ十六年より二十年以前にありて西洋學の新に輸入し來りし當時の世の人妖怪等のことを口する者なく偶々之を唱ふる者の舊習頑固を以て目せられ世の人の齡する所とあらざりしにあらすや爾來文物の進歩ハ日を逐て隆盛を極むるに至り七八年を経十二三年を経るに従ひ久まゝ世の中に影を隱えたりし妖怪ハ漸

く學者の口頭お上るに至り此妖怪説ハ終つ今日ハ公然として學者の研究するに至りし者果して何の理由に依るか二十年以前にハ妖怪なかりしや否や

眞理ハ終古依然たり唯觀察する所の眼孔の大小ハ依りて或ハ之を廣く觀し或ハ之を狭きか如く思爲せるのみあり例之燈をとりて夜行するに始めハ四邊何物も見ることなく全く黒幕を以て包まれたるか如きも歩を進むるに従ひ松の木立も現ハれ路傍の石地蔵も現はれ終に川を認め橋あるを知るに至る即ち十二三年以前にハ七八年前より幾許か道理の廣きことを知り十二三年以前より今日の眞理の範圍廣きことを認め居るあり然れハ今日學者が理法外ありとし無稽ありとしして排斥せる所も亦恐くハ異日の眞理にあらざるべきを知らんや眞理の版圖ハ尙廣漠たり豈今日僅に知られたる狭少なる理法

に安んじて他の事實を安排し過くへけんや讀者よ本編に記述せる所の著者が淺薄たる意見に過ぎず其理論の如き恐く常を得ざる者多からん然りと雖とも議論の當否に暫く論せず其の所載の事實をも歐洲學者の所説に合せざる者あるか故に妄誕無稽ありとして排斥することを止めよ亦恐くハ安排の誹を免れざるならん

附て云ふ幻術の理法と云へるか此の冊子の題名に適するや否やハ著者自らも疑ひなき能はず適當の名を得ざるか爲めに書中一節の名を以て之に題せしのみなり其題名の如きハ讀者の名くる所に一任す請ふ之を諒せよ

幻術の理法 附神と幽霊終

明治廿七年十二月廿七日印刷

幻術の理法

明治廿七年十二月三十日發行

定價金十六錢

編纂者

近藤嘉三

印刷兼發行者

駒崎林三

發行兼賣捌所

東京神田區美土代町三丁目四番地
穎才新誌社

東京神田區美土代町三丁目四番地

關西專賣書林

柳原喜兵衛

同

吉岡平助

關東專賣書林

大倉孫兵衛

九州專賣書林

積善館支店

東京日本橋區通二丁目
臨阿縣博多市中島町

版權
所有